大県郡条里遺跡確認調査概要

—恩智川（法善寺）多目的遊水地予定地の調査—

2005年3月

大阪府教育委員会

はじめに

生駒山地南端斜面には2,000基近くの古墳が群集する平尾山古墳群がある。そして、その山麓には各時代にまたがる複合集落遺跡が連なる。今回、山麓に併行して北に流れる恩智川との間、大県郡条里・山ノ井遺跡内で多目的遊水地の計画が持ち上がった。

本調査地点は柏原市と八尾市の市境となる。北側の八尾市側には山ノ井遺跡と接して神宮寺跡があり、大県郡に属す。柏原市側の山ノ井遺跡は弥生・古墳時代の遺物が出土し、その南東側には古墳時代の鉄鍛冶生産で著名な大県遺跡がある。

大県郡条里遺跡の実態はこれまで必ずしも明らかでなかったが、それをも含めて対象地が広範囲に及ぶことから、今回の確認調査によって、各地点に様々な時代の遺構・遺物が含まれることが分かった。

中でも、東高野街道に接する東縁部は、南東の大県遺跡と直接的につながる古墳時代中期のものが特徴的である。また、瓦を伴った奈良・平安時代の土器は東半部に広く分布し、南の平野廃寺、北の神宮寺跡との関連性をうかがい知ることができる。さらに、中央部分を中心として中世の遺物がほぼ全域にまんべんなく分布することが確認できるとともに、西側の恩智川沿いでは縄文・弥生時代の遺物も確認できた。

こうした豊富な各時代に及ぶ所見は、当該地の立地性ゆえに、複合した遺跡の特色ある姿を再確認させるものであり、その歴史的な重要性を如実に示すものであった。

調査にあたっては、柏原市教育委員会、八尾土木事務所、地元自治会各位をはじめとする多くの関係者の方々にご協力いただいた。厚く感謝するとともに、今後ともこの地における文化財保護行政にご理解、ご協力をお願いするとともに、この文化遺産の宝庫ともいえる当該地についてよりよい保護・保全・活用に向けて共に推進できるようお願いする次第である。

平成17年　3月

大阪府教育委員会文化財保護課長

向井正博

例　　言

1．　本書は、大阪府教育委員会が、大阪府土木部の依頼を受け、恩智川（法善寺）多目的遊水地予定地について平成14・15年度に実施した柏原市法善寺4丁目地内所在の大県郡条里遺跡他の遺構・遺物確認調査の概要報告書である。

2．　調査は、文化財保護課　調査第一グループ　総括主査　岩崎二郎、主査　泉本知秀・一瀬和夫が担当した。

3．　調査に要した経費は、大阪府土木部が負担した。

4．　調査の実施にあたっては、柏原市教育委員会、大阪府土木部、八尾土木事務所をはじめとする諸機関、諸氏の協力を得た。

5．　本書の編集は、一瀬が担当し、執筆は調査担当者の他、参加者が分担した。

6．　本書に掲載した遺物写真の撮影は、有限会社　阿南写真工房に委託した。

7．　本概報は、300部を作成し、一部あたりの単価は368円である。

目　　次

はしがき
例言
目次

第1章　調査地の環境と調査の経過 ―― 1
第2章　調査の概要 ―― 5
　第1節　平成14年度の調査 ―― 5
　第2節　平成15年度の調査 ―― 6
　第3節　出土遺物 ―― 10
第3章　まとめ ―― 15
折込図 ―― 17
写真図版

報告書抄録

大県郡条里遺跡確認調査概要

恩智川（法善寺）多目的遊水地予定地の調査

第１章　調査地の環境と調査の経過

南北に連なる生駒山地から金剛山脈一帯の斜面には数多くの古墳が築かれていることは、古くから知られる。平尾山古墳群と総称される古墳群は、最近では、2,000 基近くまで確認されようとしている。こうした古墳に葬られた人々の営みは必ずしも明らかではないが、近年、その山麓では複合集落遺跡が多く確認されつつある（図１）。

今回、その山麓とそれに併行して流れる恩智川の間、八尾市と柏原市との市境から南側に遊水地が計画された。大阪府柏原市法善寺４丁目にあるその予定地は約 114,000 ㎡に及ぶ広範なもので、西半が大県郡条里遺跡、東半が山ノ井遺跡に含まれる。

それだけにとどまらず、この周囲には遺跡が密集しており、北端に神宮寺遺跡、東端に東高野街道、南端には平野遺跡が存在する。そして、西側は恩智川を隔て法善寺廃寺がある。さらに、これらの遺跡周囲にも、北に弥生時代の代表的な集落である恩智遺跡、東に先の大型群集墳平尾山古墳群、南東に古墳時代の鉄鍛冶遺跡である大県遺跡がある。

古墳群をのぞいて、これら遺跡の多くは扇状地状台地に立地する。この周辺の柏原市域では、まず、大県遺跡において縄文時代早期の押型文系土器の出土が確認される。その後、中期から晩期にかけて土器の出土範囲は拡大する。弥生時代はさらに拡大し、河内平野生駒山地西麓の台地全体に見られ、山ノ井・平野・大県南・太平寺・安堂といった遺跡が見られるようになり、大県遺跡はその核的な存在として継続する。対して北側の八尾市域では、恩智遺跡がその役割を果たすことになる。古墳時代には大県遺跡がより以上に拡大し、大阪府下屈指の鍛冶生産関係の遺構・遺物が全体に目立つ。ただし、今のところ、その生産集団の居住痕跡の確認は南側に限られる。

これら遺跡に接する東側丘陵斜面には、先にふれた平尾山古墳群がある。本調査対象地はその最も北側に接近する。古墳群の中でも、北北東から南南西にのびる関電道路沿いの主尾根を中心とする地域は平野・大県古墳群と称されるこの部分は概して中規模の古墳が多く、枝谷Ｂとされる個所から派生する地点から南へは横穴式石室が一気に豊富となる。1975 年の分布調査では１～ 29 支群 139 基の古墳を確認していたが、1993 年時点では新たに 13 支群 123 基の増加があった（注１）。

その中で、古墳群北端の枝谷Ａの延長は本調査対象地のやや北にそれるが、小枝谷１が北西方向にのびてきており、その延長は南東から北西に対角方向に対象地東半を横断することになる。すなわち、小枝谷１は本調査対象地と地形の起伏において、最も関係の濃い古墳グループという

ことになる。これを中心にした古墳は山ノ井・平野遺跡の東側、主尾根Ⅰ、枝谷Ｂの北側部分、10支群36基が直接対象となる。こうした古墳の被葬者と直結する手がかりを本調査対象地は残している可能性があり、きわめて重要な地点である。

さて、接近した既往の集落遺跡調査では、山ノ井遺跡に北接する神宮寺遺跡（神宮寺跡）のものをまずあげることができる。1993年に八尾市教育委員会が調査を行い、弥生時代の井戸、古墳時代後期の土坑・溝、中世の井戸を検出した。1994年には本府教育委員会が本調査区と最も接する北東側を調査し、奈良時代のピット・落ち込みを検出する他、緑釉陶器・須恵器・土師器・製塩土器・弥生土器、瓦の出土があった（図２、注２）。このことから、この周辺は奈良・平安時代、中世にかかる遺跡の存在、とりわけ古墳時代特に後半期、弥生時代後期の遺構が広がることが判明した。

対象地に最も近い後者の1994年調査の層位は、地表面がT.P.13.3ｍであり、第Ⅰ層の褐色

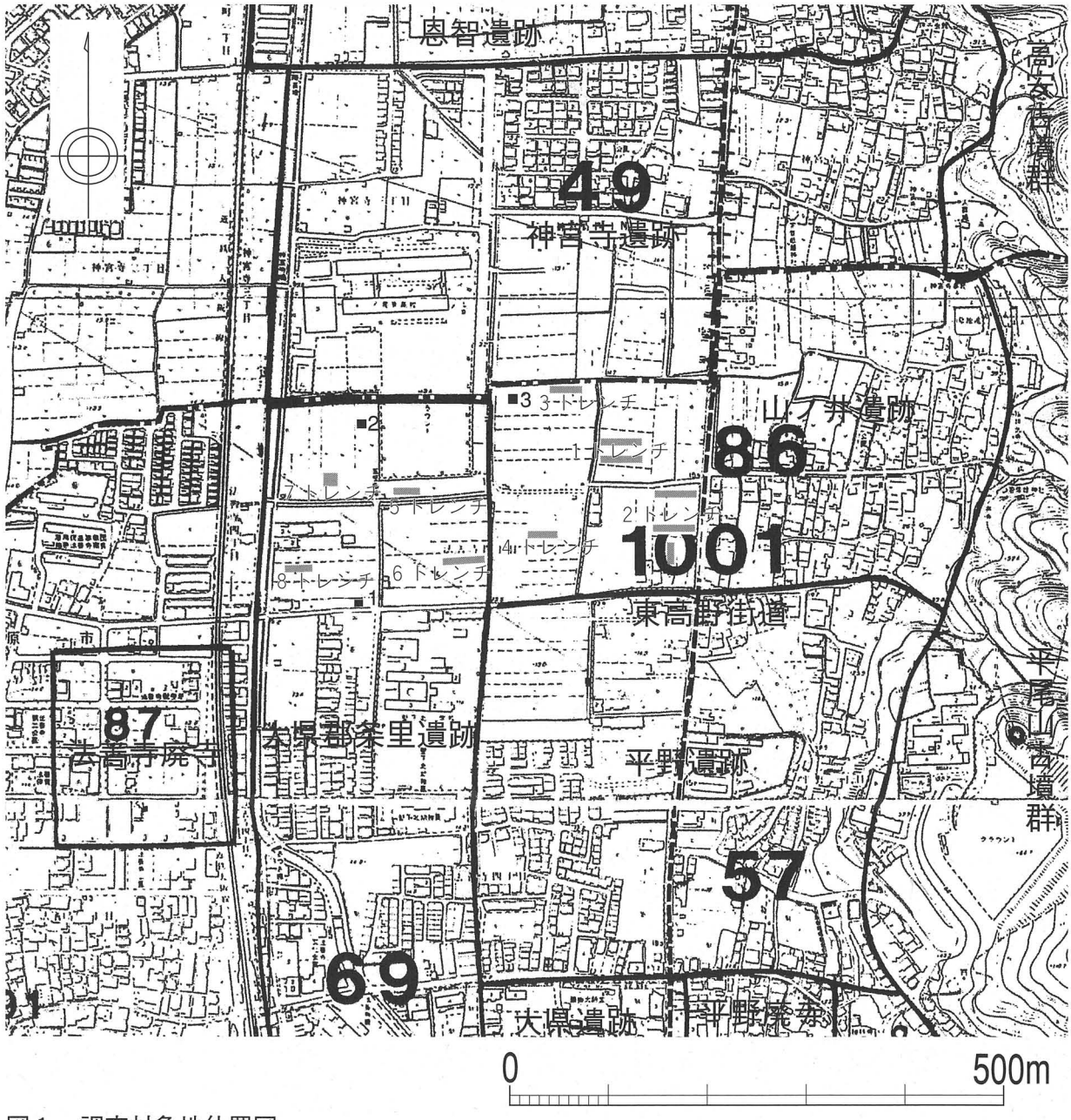


図１　調査対象地位置図

図2　平成14・15年度調査区設定図

粘土（旧耕土）が0.2 m、第Ⅱ層の黒灰色砂質土（近世以降）が0.05 m、第Ⅲ層が古墳時代以降の遺物を多く含み、黄褐色土と黄灰色土ブロック含む緑灰色砂質土（近世以降の客土）が0.2 m、第Ⅳ層が弥生時代以降の遺物を多く含み、粘質土を多く含む灰色砂質土（近世以降）が0.15 m、第Ⅴ層が古墳時代以降の遺物を多く含み、暗黄灰色砂質土（中世）が0.2 m、第Ⅵ層が古墳時代以降の遺物を多く含み、暗灰色砂質土（奈良・平安）が0.2～0.3 m、第Ⅶ層がT.P.12.4 mの高さで、古墳時代以降の遺物を多く含み、上面の褐色が硬くしまる灰褐色粘質土であり、奈良時代の遺構面となる。この遺構に削り残された灰色粘土が弥生時代後期の遺物包含層、その下は灰色粗砂となる。

この調査区は東高野街道（旧170号線）の道路西拡幅部分となり、ちょうどその道路南側、本調査地で最も東側となる2トレンチ東半の層順とは、後で述べるように共通する。

一方、予定地内のボーリング調査では、先の古墳群の小枝谷1の地形の延長がのび、洪積層の微高地が調査対象地の南東から中央をこえる範囲にかけて、T.P.9.5 mの高さでのび、その北西は急激にT.P. 5 m程に下降する。これは丘陵からの影響を受けた後にその延長で下降することも考えられる。ただし、南西隅も同じように下降することから、西端については恩智川旧流路に影響を受けていた可能性がある。

今回の調査対象地はこのような遺跡範囲に含まれ、周辺環境を有することから、遊水地の計画とその取り扱いについて調整を図るため、遺跡の性格や内容を把握する確認調査を2年次にわけ実施した。

平成14年度は西半を中心に3ヶ所、平成15年度にはさらに調査の必要な東半部を中心として全域にわたって8ヶ所の調査区を設けることになった。（一瀬）

（注1）柏原市教育委員会1993『平野・大県古墳群分布調査概報』・1995『平野・大県古墳群―高尾山創造の森に伴う調査―』
（注2）大阪府教育委員会1994『神宮寺跡発掘調査概要』

第２章　調査の概要

第１節　平成 14 年度の調査（調査番号 02052）（図１．２）

平成 14 年度は対象地の西半部に No, 1 ～３の調査区、計 28 ㎡を設け、工事計画の掘削が全体に及ぶであろう深さ 2.5 mまでの掘削を行った（図１・２）。

No, 1 トレンチは、対象地の南西部南端に位置する。現地表は O.P.14.54 m、T.P.13.33 mであり、耕土・床土が 0.4 m、黄茶色・青灰色粘土が 0.3 m、淡灰褐色微砂層・シルトが 0.8 m、その下の暗灰色シルト 0.5 mに瓦器や土師器が含まれていた。その上面は T.P.11.8 m程になる。下面には細砂層をはさんで暗灰色シルト質粘土が 0.3m あり、古代相当層と考えられ、さらに、細砂層をはさみ、0.3m の灰緑色粘土があり、古墳時代相当層となろう。さらに下には、粘性の強い灰黒色粘土が存在した。

No, 2 トレンチは、対象地の北西部北端に位置する。現地表は O.P.14.03 m、T.P.12.82 mであり、耕土が 0.2 m、砂層が 0.3 m、淡灰茶色粘土が 0.7 m、その下に No, 1 トレンチの暗灰色シルトに対応すると考えられる暗青灰色粘土が 0.6 mの厚さで存在した。その上面は T.P.11.6 m程になる。下面は淡灰青色粘土が 0.5m、淡明緑色粘土があり、おおむね同様な層順となる。

No, 3 トレンチは、対象地の北部中央やや東より北端に位置する。現地表は O.P.13.85 m、T.P.12.64 mであり、盛土が 0.8 m、耕土・床土が 0.5 m、砂層が 0.7 m、湧水が激しく確認はできなかったが、その下の粘土は遺物包含相当層となると考えられる。その上面は T.P.10.6 m程になる。下面には細砂層をはさんで暗灰色シルト質粘土が 0.3m あり、古代相当層となる。さらに、細砂層がはさみ、0.3m の灰緑色粘土があり、古墳時代相当と考えられる。さらに下には、粘性の強い灰黒色粘土が存在した。

対象地は東西で様相を異にしていたが、西半分の基本層序は共通しており、T.P.11 m台で中世の包含層がほぼ水平に認められることが分かった。この度の調査では、湧水の激しかった東半分が確認できなかった。また、西半分においても遺物包含層の上面を捉えることができたものの、その下面の把握が困難であったことから、次年度の平成 15 年度に東半分を中心とした調査区を対象地全体にまんべんなく配置することになった。（一瀬）

（注）No. をトレンチ名の頭に付す表記については、平成 14 年度分のトレンチを指す。

第２節　平成 15 年度の調査（調査番号 03044）（図２・３・７～12、図版１～４）

平成 15 年度の調査は、前年の 14 年度で把握できなかった東半分に重点をおき、そして、工事掘削が恩智川との取り付けで深くなると予想される西半分の遺物包含層の下面を確認するために計８本のトレンチ、計 1,044 ㎡を増設した（図２・３）。

遺構面が浅いと予想される東側の１・２トレンチについては幅２ｍを基本とし、遺構の平面分布の確認に努めた。そのため、１トレンチは２本に分け、２トレンチは３本に分けて実施した。３～６トレンチの中央部分では調査用地の制限があるものの湧水時の排水を考慮して幅６ｍを基本として遺構・遺物の有無の把握を行った。西側の川沿いの７・８トレンチについては、幅を極力広げて掘削深度を確保するようにした。

１トレンチ（図７・９、図版１）

このトレンチは対象地北東部に東西方向で併行して２本のトレンチを設けた。

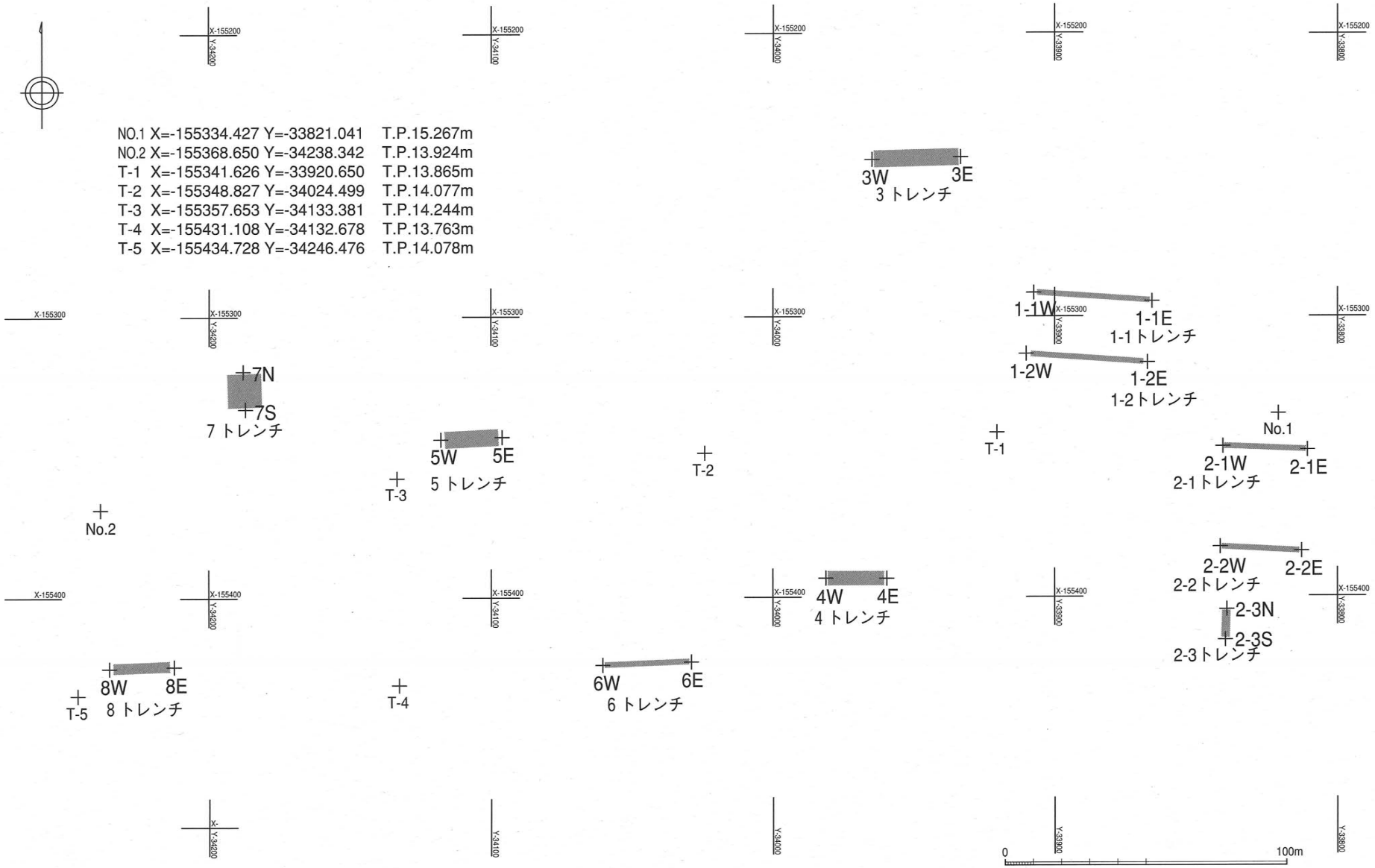
1-1・1-2 トレンチは長さ 40.0 m、深さ 1.0 ～ 1.3 ｍを掘削した。双方とも基本層序は共通する。耕作土下に、湧水のはげしい酸化を受けた灰褐色砂層が堆積し、弥生時代から近世までの遺物が含まれる。砂層上では東西方向に小溝がはしる。下ではしまりのない明灰色粘土層があり、古墳時代から近世までの遺物を含む。1-2 トレンチ東側は灰白色細砂を埋土とする東西方向、深さ 0.3 ｍの溝ないし落ち込みを認めた。さらに、下には黒味がかる泥土状粘土となる。出土遺物より、中世相当層と考えられる。上面が T.P.12.4 ｍであり、1994 年調査の暗灰色砂質土と高さは共通する。

２トレンチ（図７・10、図版１・２）

このトレンチは東端南側に３本のトレンチを設けた。2-1 と 2-2 トレンチは中央よりに東西方向で長さ 30.0 ｍと 28.0 ｍ、深さ 1.0 ｍ前後を、その南西側には 2-3 トレンチを長さ 9.5 ｍ、深さ 1.9 ｍを掘削した。３本とも層序は共通するが、2-3 トレンチは１ｍ程が盛土されていたために下部の状況は確認できなかった。

基本的には耕作土の下に淡灰褐色砂土があり、弥生時代から近世までの遺物を含む。下層は黒味がかり近世と考えられ、さらに下は黄味灰褐色粘・砂質シルトがあり、中世となる。T.P.12.45 ～ 13.11 ｍであり、１トレンチの状況と比較すると、旧 170 号線沿いが高く西へ 10 ｍ程で 0.6 ｍ程急下降することになる。中世期の条里地割りの東限はそのあたりになろうか。その下は、多くの遺構が存在する。これらは検出のみにとどめたため上層の出土遺物・埋没土から類推すると、古代・中世期及び、一部に古墳時代が含まれる時期と考えられる。遺構が多いことから、下の５層の黒味茶褐色砂質土は 2-1 と 2-2 トレンチで深度確認のみ行った。これは 1994 年調査の灰色粗砂上部の弥生・古墳時代相当層と考えられる。上面高は 2-1・2-2・2-3 トレンチ各々

図 3　平成 15 年度調査区座標位置図



でT.P.12.5 m、12.5 ～ 12.9 m、12.7 mであり、ややゆるやかに南東部が高くなる状況を呈する。

3トレンチ（図7・11、図版2・3）

このトレンチは長さ30.0 m、深さ1.7 ～ 2.0 mで掘削した。西側のNo. 3トレンチと1トレンチで確認した砂層がここでも耕作土下に存在したが、ここでは湧水がほとんどなかった。この赤味灰色土の上面では東西方向に平行する小溝を検出し、下では下層粘土に上層の砂を埋土とした足跡と東西方向の溝を検出した。下面はT.P.12.3 mであり、1トレンチはやや高く12.6 m、No. 3トレンチは10.6 mと西に向かって傾斜する。3トレンチの最も西側では地目変わりの南北方向の溝ないし段があり、これより西が2.0 m程下降することになる。下層は1トレンチと同様に明灰色粘土、黒味暗灰色泥土、暗灰色粘質シルトと続くが、粘質シルト上面がT.P.12.1 mから11.5 mまで下降する。中世上面は12.2 m付近にある。

4トレンチ（図8・11、図版3）

このトレンチは2トレンチ西側より里道をはさんで長さ20.0 m、深さ2.0 mを東西方向に掘削した。ここでも耕作土下に砂層が存在し、下はトレンチ東西で地目が分かれ、東・南西側は水田、北西側は畠となり、島畠状のものが形成されていた。この土地利用は調査対象地周辺の現状と大差ない。粘土上面は、高い方がT.P.12.7 m、東側の低い方は12.3 ～ 12.4 mであり、総じて3トレンチよりわずかに高い。しかし、2トレンチ東側以外は3・4トレンチを含め、この近世面は島畠状隆起以外はほぼ水平と考えてよく、その上に洪水砂が覆ったと考えられる。下層は1・3トレンチと同様であり、T.P.12.0 mで黒味灰色泥土上面を確認し、その下層で奈良時代の瓦や中世遺物が出土した。

5トレンチ（図8・11、図版3）

このトレンチは長さ18.7 m、深さ2.0 mを東西方向に設けた。耕作土下に砂層が存在し、下層粘土上面T.P.12.5 m前後、北側に東西方向の畦畔が確認できた。さらに下層は黒味暗灰色泥土、暗灰色粘質シルトとなり、奈良時代の瓦、中世の土師器・瓦質土器を多く含み、中世上面はT.P.11.9 mであり、1・2・6トレンチをのぞいて、さほど高低差はない。

6トレンチ（図8・12、図版4）

このトレンチは長さ30.0 m、深さ1.5 mを東西方向に設けた。耕作土下に砂層が存在し、トレンチ西側で2基の井戸を並んだ状況で検出した。この最上部の砂から古墳時代の須恵器・土師器が出土することから、掘削が及ばなかった下層域に、当該期の包含層が存在することを予期させる。このトレンチの明灰色粘土上面はT.P.12.8 ～ 13.0 mであり、1・3・5トレンチはT.P.12.5 m前後で水平であり、西半部もまた同様であることから、近世期には4 ～ 6トレンチ

付近から南東側及び２トレンチ南・東側が一段高くなっていたようである。下層は黒味暗灰色粘土、暗灰色粘質シルトであり、中世の土師器・瓦器を含む。中世上面はT.P.12.5～12.7 mとなる。

７トレンチ（図８・12、図版４）

掘削深度を4.0 mにするために、一辺12 mの方形のトレンチを設定した。耕作土の下はトレンチ東半部中心に南南西―北北東方向にかなり急な流れがあり、複雑な砂層堆積が見られた。そのために、２層に相当する明灰色粘土は2-1層の表層部分以外に認められず、砂質シルトと中・細砂が構成土の大半を占めた。上面はT.P.12.0～12.5 mであり、流路状となった東側が全体からすれば低くなる。下層は黒味暗灰色泥土であり、中世の瓦器・土師器を含む。中世上面はT.P.12.0 mとなる。T.P.11.6 mのNo, ２トレンチより高く、このトレンチより北側で一段下がる可能性が高い。さらに、下の暗灰色粘質シルト層で縄文・弥生土器片が出土しており、当該期の遺構は下層域で検出されることが予想される。ただし、下部の暗灰色砂質シルトで平安時代の黒色土器が出土し、４層乳灰色粘質シルト面で掘立柱状のピットを確認できたことから、この地点ではT.P.10.3 m以下まで縄文～古墳時代面は下がることになる。２トレンチの最も高い同時代面と比べると、2.6 mの比高差となる。

８トレンチ（図８・12、図版４）

長さ18.7 m、深さ2.0 mを東西方向に設けた。耕作土下に砂層があり、その下に上面がT.P.12.2～12.5 mと周囲と同じ高さの明灰色粘土、上面がT.P.11.7～11.9 mと７トレンチと共通する黒味暗灰色泥土・暗灰色粘質シルトが同様に続く。ここでも最も深いところで灰色砂質シルト層を検出している。この層は上面のT.P.10.9 mまで瓦器・土師器などの中世遺物が出土するものの、古墳時代相当層になる可能性が高い。ところで、南にあるNo. １トレンチは耕作土下の砂層をはさまず、明灰色粘土相当層上面がT.P.12.9 mへと0.5 m程上昇している。さらに、暗灰色シルトが続くが、その下の層順は共通しないことから、６・８トレンチとNo. １トレンチの間で基盤が上昇するとともに、中世以前の堆積状況はかなり複雑な状況を呈することが分かる。（一瀬）

第３節　　出土遺物（図４～６、表１、図版５・６）

ここでは、各トレンチからの出土遺物を紹介する。土器・瓦類などが出土し、そのうち29点を図化した。中でも２トレンチの出土量が多い。図４には１～２トレンチ出土遺物を、図５には２～４トレンチのものを掲載した。

1-1 トレンチ**1**層からは１、３層からは**2**・**3**が出土。**1**は須恵質鉢で内外面共に回転ナデ。底部は不定方向のナデ調整で仕上げている。**2**は土師器小皿で、口縁部を横ナデで整えている。外面には指頭圧痕が残り、内面はナデ調整。**3**は瓦質鉢で、口縁部を肥厚させて面取りを行っている。

1-2 トレンチ１層からは**4**、３層からは**5**・**6**が出土。**4**は青磁椀で、内面と口縁部外面に釉が施されており、外面露胎部は回転ケズリ。内面には３条の傷があり、その箇所は露胎している。５は弥生土器の台付鉢で、口縁部端面に櫛描列点文が施されており、口縁部の下面はケズリ。生駒西麓産の胎土を使用。**6**は瓦質鉢で、口縁部は体部より垂直に伸びた後に外反する。体部外面は指ナデで内面はナデ調整。

2-1 トレンチ２層からは**7**～**12**が出土。**7**は須恵器杯身で内外面共に回転ナデ。立上がりは内上方に伸び、受部は外方に伸び突起を有する。**8**は須恵器杯蓋で、天井部外面はヘラケズリを行い、他の部分は内外面共に回転ナデ。外方に突出した稜線を持ち、口縁端部は浅く窪んでいる。**9**は須恵器杯蓋で、内外面共に回転ナデ。口縁部内面にかえりを持つ。かえりは口縁端部より上方に位置する。**10**は土師器小皿で、体部上半を横ナデによって外反させている。内外面共にナデ調整で、体部外面に指頭圧痕が残る。**11**は弥生土器の甕で外面はナデ調整。内面はハケメを施した後にナデ消しているが、部分的にハケメが残っている。生駒西麓産の胎土を使用。**12**は土師器の土釜で、内外面共にナデ調整。鍔部はほぼ水平に伸び、先端は肥圧して丸味を帯びている。

2-1 トレンチ３層からは**13**～**15**が出土。**13**は須恵器杯身で、底部はヘラケズリを行い他の部分は内外面共に回転ナデ。**14**は土師器の杯で、内外面共にナデ調整が施されているが、指頭圧痕が残っている。**15**は瓦質三足付土釜で、内外面共にナデ調整。口縁部端面をナデによって平坦に仕上げている。鍔部は外方に下向きに伸びる。

2-1 トレンチ４層からは**16**～**21**が出土。**16**は須恵器壷？の蓋で、天井部外面はヘラケズリで内面はナデ調整。その他の部分は外面横ナデ、内面回転ナデ。天井部につまみがつくと思われる。**17**は土師器の皿で口縁部は横ナデで、底部はナデ調整。**18**は瓦器小皿で、口縁部横ナデで、底部外面に指頭圧痕が残る。内面にはヘラミガキを施している。**19**は瓦器椀で、口縁部外面から内面にかけてナデ調整で、外面には指頭圧痕が残る。**20**・**21**は土師器鉢または甑の把手である。

2-2 トレンチ２層からは**22**～**27**が出土。**22**は須恵器杯身で、内外面共に回転ナデ。立上がりは内上方に内湾気味に伸び、口縁端部はにぶい段を有する。**23**・**24**は須恵器杯蓋で、**23**は

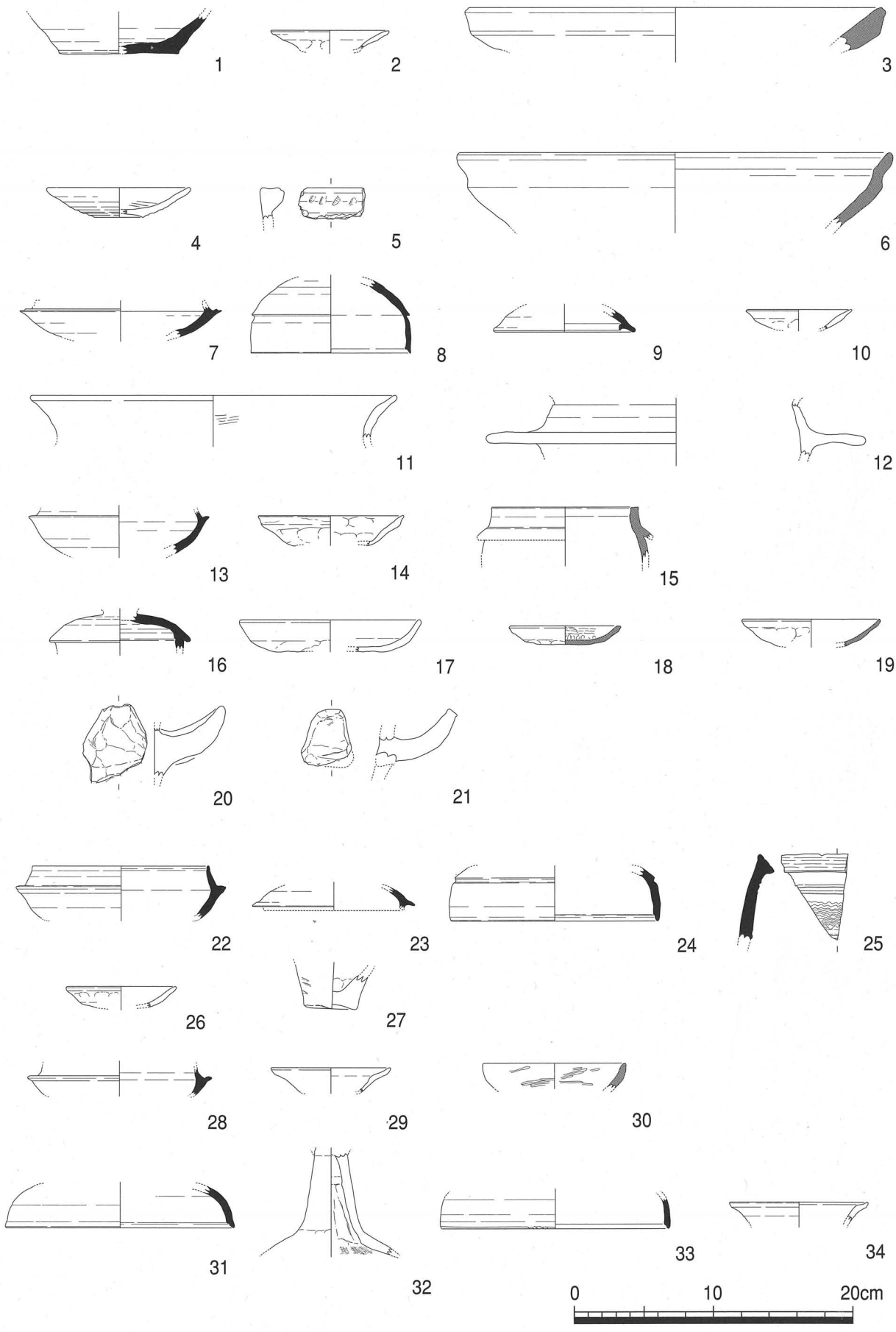


図4　1・2トレンチ出土土器

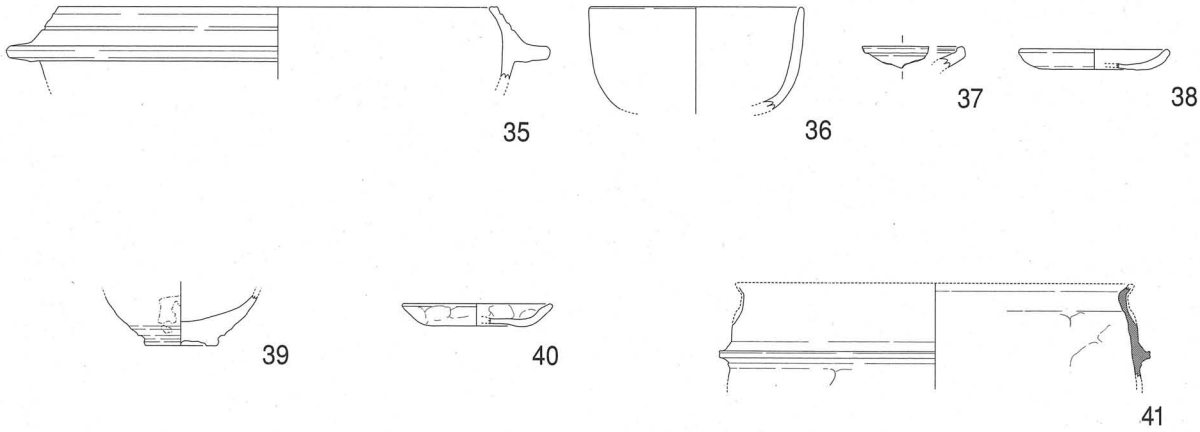


図５　２～４トレンチ出土土器

図5

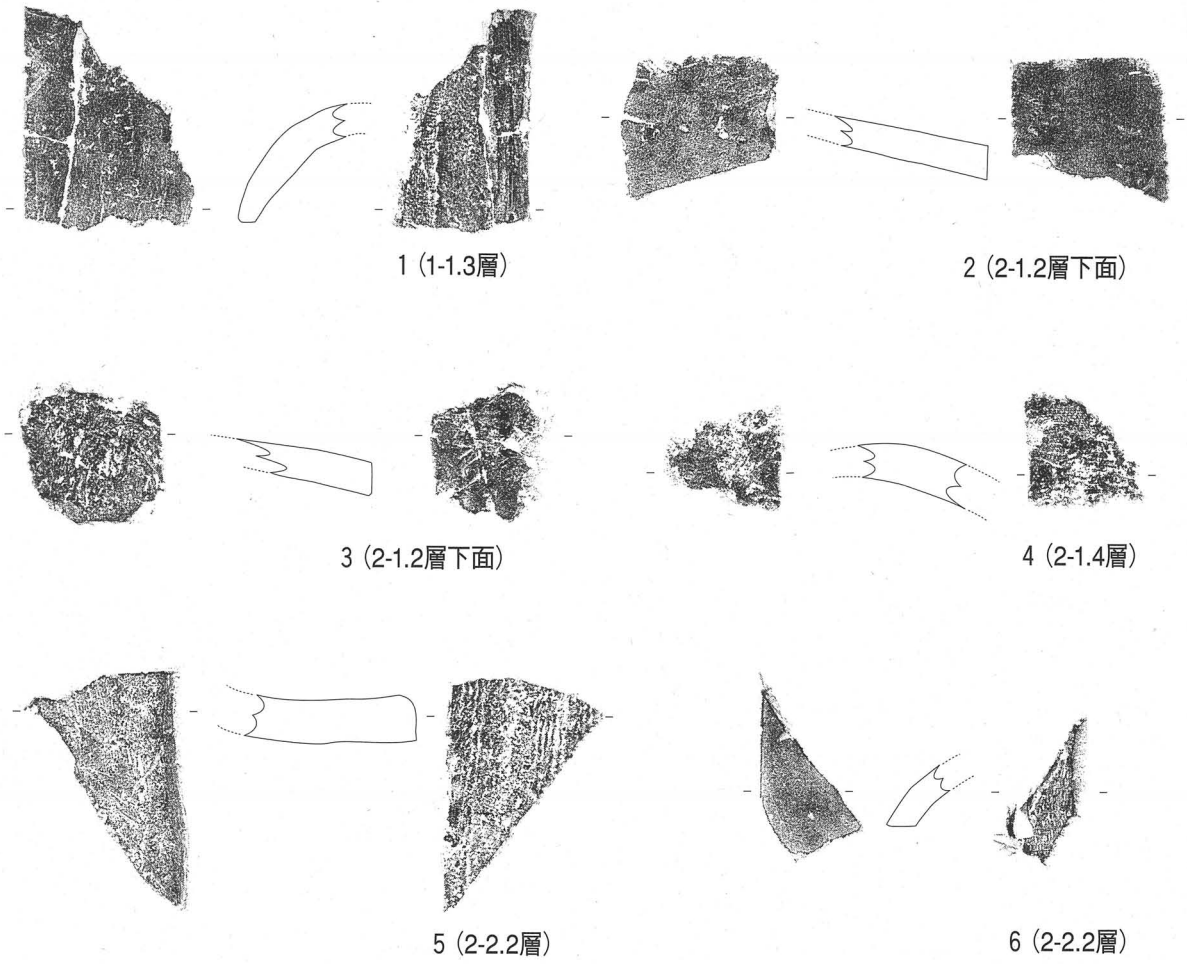


図６　１・２トレンチ出土瓦

図6

表1　出土土器観察表

No.	トレンチ	層位	器種	法量 (cm)			胎土	焼成	色調		備考
				口径	器高	低径			外面	内面	
1	1-1	1層	須恵器・鉢			(8.4)	良好	良好	淡灰色	淡灰色	
2	1-1	3層	土師器・小皿	(8.6)			良好	良好	淡灰黄色	淡灰黄色	
3	1-1	3層	瓦質土器・鉢	(30.0)			良好	良好	灰黒色	灰黒色	
4	1-2	1層	青磁・小皿	(10.3)	2.1		緻密	堅緻	灰褐色	灰黄色(釉)	外面の口縁付近は釉付着。
5	1-2	2層	弥生土器・台付鉢				良好	良好	茶褐色	茶褐色	生駒西麓の胎土を使用。
6	1-2	2層	瓦質土器・鉢	(31.0)			良好	良好	淡灰白色	暗灰白色	
7	2-1	2層	須恵器・杯身	(14.2)			緻密	堅緻	灰色	灰色	
8	2-1	2層	須恵器・杯蓋	(11.4)			緻密	堅緻	灰色	灰色	
9	2-1	2層	須恵器・杯蓋	(10.2)			良好	良好	明灰色	明灰色	
10	2-1	2層	土師器・小皿	(7.6)			良好	良好	淡灰褐色	灰褐色	
11	2-1	2層	弥生土器・甕	(26.0)			良好	良好	茶褐色	茶褐色	生駒西麓の胎土を使用。
12	2-1	2層	土師器・土釜	鍔径 (27.0)			良好	良好	茶褐色	赤茶褐色	
13	2-1	3層	須恵器・杯身	(12.9)			緻密	堅緻	灰色	灰色	
14	2-1	3層	土師器・椀	(10.4)			良好	良好	淡灰褐色	淡灰褐色	
15	2-1	3層	瓦質土器・三足付土釜	(10.4)			緻密	堅緻	暗灰色	暗灰色	
16	2-1	4層	須恵器・蓋	(10.0)			良好	やや不良	暗紫灰色	暗赤紫色	
17	2-1	4層	土師器・皿	(13.0)			良好	良好	黄褐色	黄褐色	
18	2-1	4層	瓦器・小皿	(8.0)	1.5		緻密	堅緻	灰黒色	灰黒色	
19	2-1	4層	瓦器・椀	(10.0)			緻密	堅緻	灰黒色・灰色	灰黒色	
20	2-1	4層	土師器・鉢?甑? (把手)				良好	良好	淡茶褐色	淡茶褐色	生駒西麓の胎土を使用。
21	2-1	4層	土師器・鉢?甑? (把手)				良好	良好	淡橙色	淡橙色	
22	2-2	2層	須恵器・杯身	(12.6)			緻密	堅緻	暗灰色	灰色	
23	2-2	2層	須恵器・杯蓋	(11.6)			良好	良好	明黄灰色	灰色	
24	2-2	2層	須恵器・杯蓋	(15.0)			緻密	堅緻	灰色	灰色	
25	2-2	2層	須恵器・甕 (口縁)				緻密	堅緻	紫灰色	紫灰色	
26	2-2	2層	土師器・小皿	(8.0)			良好	良好	灰白色	灰白色	
27	2-2	2層	弥生土器・甕?鉢?			3.4	良好	やや不良	淡茶褐色	淡茶褐色	生駒西麓の胎土を使用。
28	2-2	3層	須恵器・杯身	受部径 (13.4)			緻密	堅緻	灰色	灰色	
29	2-2	3層	土師器・小皿	(8.4)			良好	良好	橙色	橙色	
30	2-2	3層	瓦質土器・椀?	(9.2)			緻密	堅緻	灰黒色	灰黒色	
31	2-2	4層	須恵器・杯身	(16.4)			良好	やや不良	明灰色	明灰色	
32	2-2	4層	土師器・高杯	脚柱径 (2.4)			良好	良好	橙色	橙色	
33	2-2		須恵器・杯蓋	(16.4)			緻密	堅緻	暗灰色	灰色	
34	2-2		青磁・壷	(10.0)			緻密	堅緻	灰オリーブ (釉)	灰オリーブ (釉)	
35	2-3	4層	土師器・土釜	(23.0)			緻密	堅緻	橙色	橙色	
36	3	1層	磁器・椀	(11.2)			緻密	堅緻	淡黄灰色 (釉)	淡黄灰色 (釉)	
37	3	3層	土師器・甕 (口縁)				良好	良好	淡茶褐色	淡茶褐色	生駒西麓の胎土を使用。
38	3		土師器・小皿	(9.0)	1.1		良好	良好	淡灰褐色	淡灰褐色	
39	4	1層	施釉陶器・椀			(3.8)	緻密	堅緻	にぶい赤褐色	暗緑灰色 (釉)	外面にも一部釉が付着。
40	4	1層	土師器・小皿	(8.0)	1.3		良好	やや不良	暗茶褐色・暗橙色	暗橙色	
41	4	4層	瓦質土器・土釜	鍔径 (22.6)			良好	良好	黒褐色	黒褐色	

内外面共に回転ナデで、口縁部内面にかえりを持つ。24は内外面共に回転ナデで、外面には不明瞭な稜線が施されており、口縁端部は段を有する。25は須恵器甕の口縁部で、櫛描文を挟み凹線が施されている。26は土師器小皿で口縁部横ナデで、内外面共にナデ調整。外面に指頭圧痕が残る。27は弥生土器の甕または鉢の底部で、外面はタタキの後にナデ消しを行い、内面には指頭圧痕が残る。生駒西麓産の胎土を使用。

2-2トレンチ3層からは28～30が出土。28は須恵器杯身で内外面共に回転ナデ。立上がりは内上方に伸び、受部はやや上向きに外方に伸びる。29は土師器小皿で内外面共にナデ調整。30は瓦器椀で内外面共にヘラミガキが施されており、口縁部は丸味を帯びている。

2-2トレンチ4層からは31・32が出土。31は須恵器杯蓋で、内外面共に回転ナデ。口縁端部は段を有する。32は土師器高杯で、脚柱部内面にはシボリ痕が残り、脚部内面には布目圧痕が残る。外面は摩滅が激しく観察困難であるがヘラケズリと思われる。

出土層位不明の遺物は33・34である。33は須恵器杯蓋で、内外面共に回転ナデで、口縁端部ににぶい段を有する。34は青磁壷の口縁部である。

2-3トレンチ4層からは35が出土。35は土師器土釜で、内傾した口縁部を持ち口縁端部は平坦である。また、横ナデによって口縁部に段を造り出している。鍔部は水平で端部は面取りを行っている。

3トレンチ1層からは36、3層からは37が出土。また、出土層位不明の遺物は38がある。36は磁器椀で全面に釉が施されている。37は庄内式甕の口縁部である。生駒西麓産の胎土を使用している。38は土師器の小皿で、内外面ナデ調整。

4トレンチ1層からは39・40、3層からは41が出土している。39は陶器椀の底部で、内面に暗緑灰色の釉が施されている。外面にも一部釉が付着している。41は瓦質三足付土釜で、内外面共にナデ調整。口縁部横ナデで鍔部より下と内面に指頭圧痕が残る。鍔部は短く端部に面取りが行われている。

各トレンチより出土した瓦のうち、図化できたのは図6の6点である。1は内面に布目痕と側板痕、4は内面に布目痕、5は外面にタタキが各々観察できた。

この他に、写真で示した図版5・6の42～45の遺物がある。42・43は1-1トレンチより出土した。42は弥生土器の壷または甕の底部である。43は須恵器の椀または杯の高台である。44は2-1トレンチで出土した土師器高杯。45は2-3トレンチの表土より出土した瓦質火舎の口縁部である。

以上、今回の調査では、古墳時代中期ばかりでなく、後期以降のＴＫ43～209・ＴＫ217と考えられる須恵器も確認することができるとともに、さらには弥生土器や南北朝期前後の瓦器椀や瓦質土器もみられた。（大矢）

第３章　まとめ

今回の確認調査対象地では次のような成果があった。

東側の東高野街道（旧 170 号線）沿いは扇状地形となり、その微高地上にある２トレンチを中心として、T.P.12 m前後の高さで、古墳時代の遺物が多く認められた。この高さは 1994 年の第Ⅶ層の T.P.12.4 m前後という値と共通することから、街道西側沿いはまんべんなく当該期の遺構・遺物が分布することになる。南方の大県遺跡とも考え合わせ、渡来系集団の集落跡が北側の神宮寺遺跡も含めて山麓沿いに広がることが分かる。また北側１トレンチも含め、1994 年調査区と同様に弥生土器（中・後期）や庄内式甕（弥生時代末～古墳時代初め）の出土があり、下層に関しても弥生時代後半期の広がりも確認できる。

この上層では溝・土坑とともに、これも 1994 年調査区同様、奈良時代の土器と布目瓦が出土する。瓦の出土は対象地中央部の６トレンチまで広がりを見せ、北側の神宮寺遺跡から対象地南側までの東半分まで、寺院跡ないしは掘立柱建物を中心とした集落跡が集中することになり、南側の平野廃寺との関係も注意される。

さらに、平安時代以降の中世遺物は対象地のほぼ全域に確認できる。特に東側では溝、土坑、落ち込みといった遺構が検出できるとともに、中央北側の５トレンチの T.P.11.5 m付近では須恵器、瓦器、土師器、瓦を多く含んだ落ち込み状のものもある。そして、この５トレンチと２トレンチに遺構が顕著に認められ、周囲より一段高くなることから、当該期には耕作地で囲まれた屋敷地の構造が推測される。他に１・６トレンチもその候補にあがることから、対象地内に少なくとも数箇所の屋敷地は点在したものと推測される。平坦な水田区画そのものは、恩智川を西限、２トレンチの西半を東限、６・８トレンチと No, 1 トレンチの間を南限、７トレンチと No, 2 トレンチの間を北限として、拡がっていたと考えられる。一方、近世の耕作土である明灰色粘土上面は部分的に島畠が取り入れられる部分もあるが、全体に T.P.12.5 m前後で平坦である。この状況と異なるのは、対象地縁辺の２・４・６トレンチから No, 1 トレンチの南東が一段高くなることと、No. 3 トレンチの粘土面が２m下がることである。後者は溜池の可能性がある。

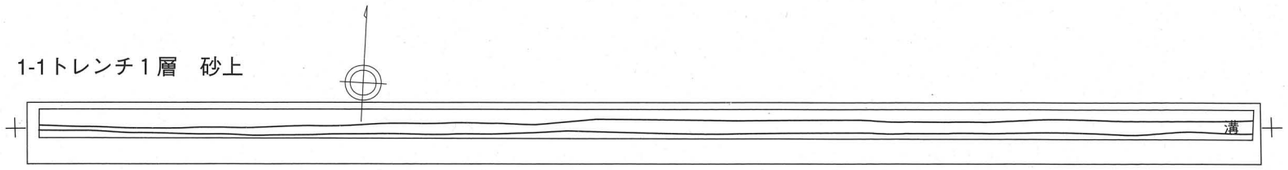
このように面的に確認できたものの他に、北西側の７トレンチでは T.P.11.6 m前後の中世の層中に石器、縄文土器、弥生土器（前期）がまきあがって出土することから、さらに下層に縄文時代晩期から弥生時代前期の遺構・遺物が存在することが予期される。西側の下層域は少なくとも T.P.10.3 mまでは遺物を包含することを確認した。

こうした成果として、縄文・弥生時代、古代そして、中世以降の知見があった。また、立地も丘陵・扇状地から平野部に向けて、最初に広い平地が広がる箇所であり、遅くとも中世期にはそれが形成されていたことになる。課題として、大県遺跡群や平尾山古墳群から西側の平野へと移る古墳時代の空間的広がりの様相についても、重要な鍵を握る地点であることをも示している。

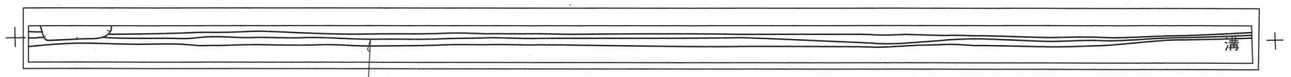
また、縄文・弥生時代についても下層部分にも発掘調査が及ぶことにより、その実態が明らかなものとなるだろう。　（一瀬）

（注）本調査には、小倉　勝、細川晋太郎、富田卓見、大矢祐司、小野木ルリコ、高嶋千佳、松村祐香、寺田麻子をはじめとする諸嬢・諸氏の助力があった。

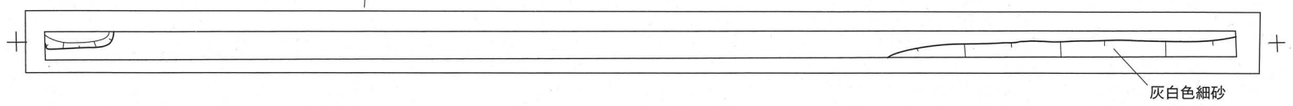
1-1トレンチ１層　砂上



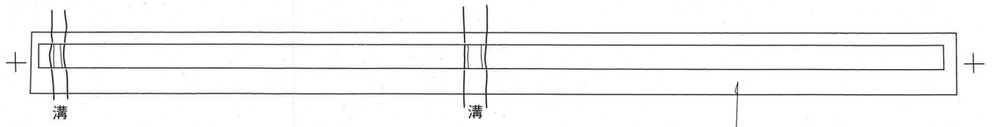
1-2トレンチ１層　砂上



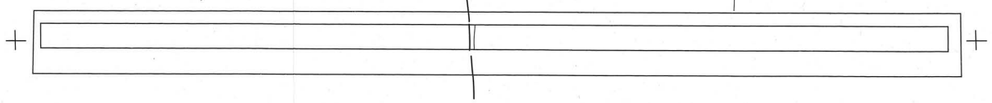
1-2トレンチ１層　砂下



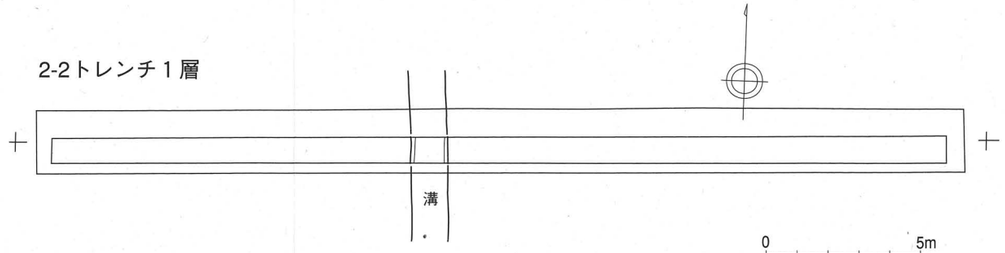
2-1トレンチ１層



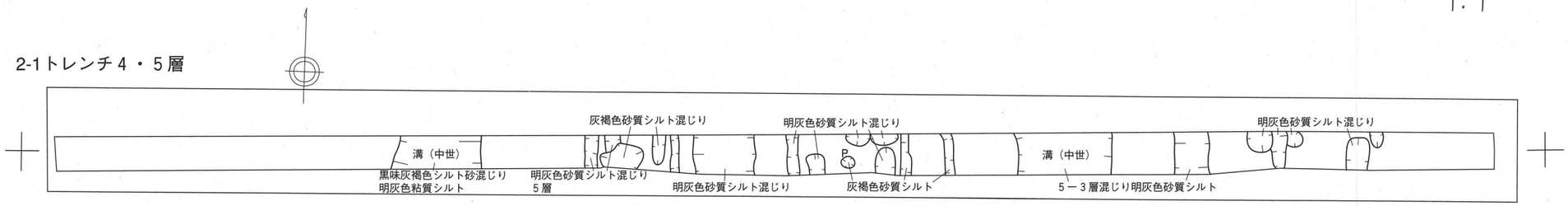
2-1トレンチ２層　落ち込み　黒味灰褐色砂質シルト



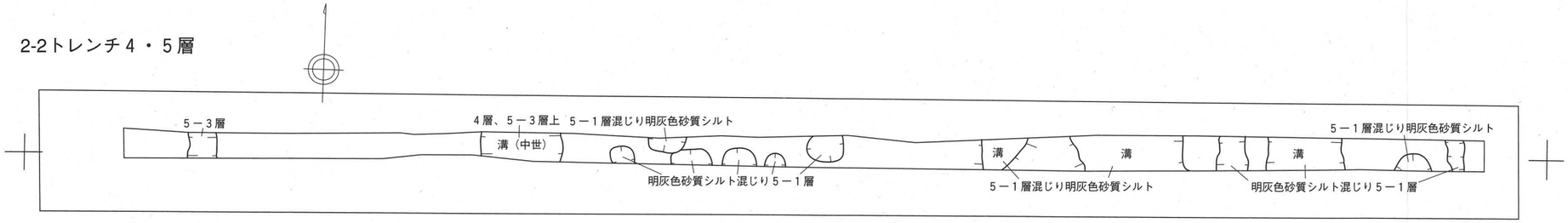
2-2トレンチ１層



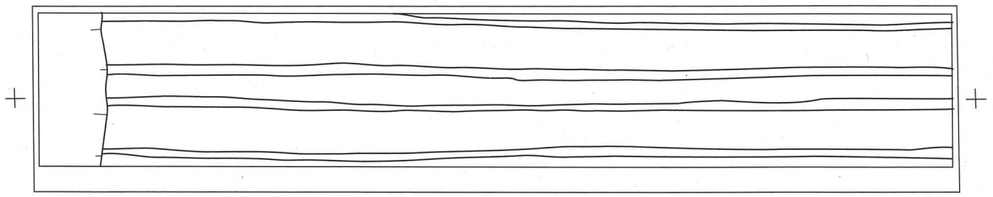
2-1トレンチ４・５層



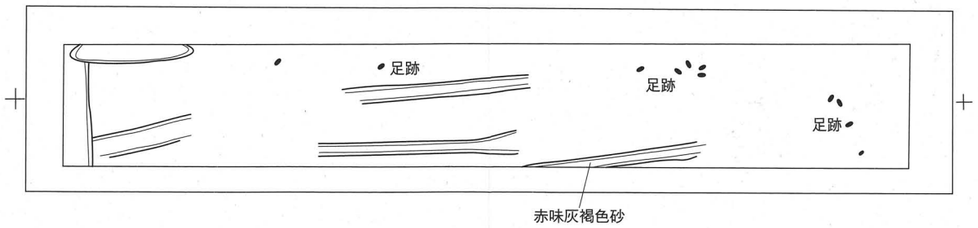
2-2トレンチ４・５層



3トレンチ１層　砂上



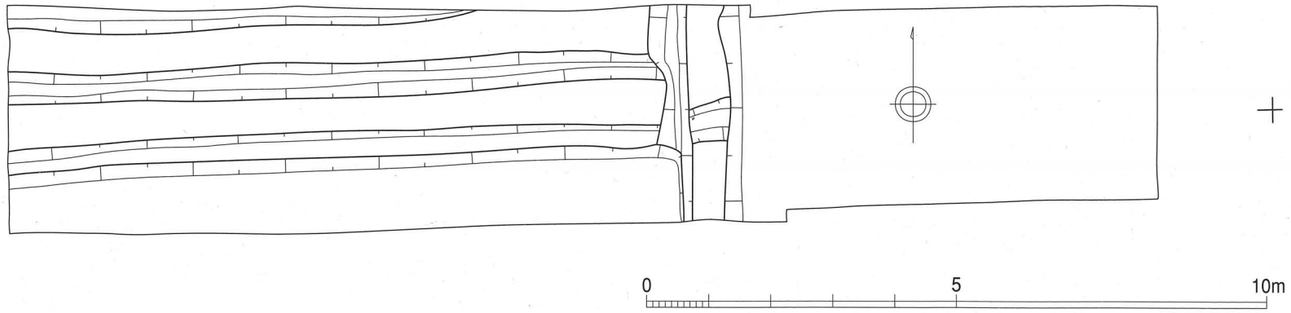
3トレンチ２層　明灰色粘土上



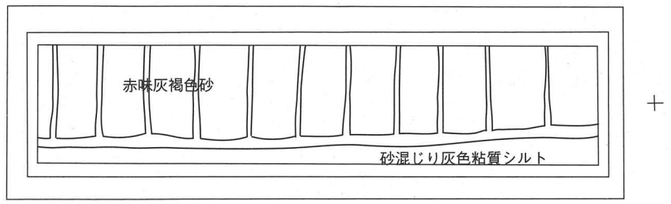
0　5m

図7　1～3トレンチ平面図

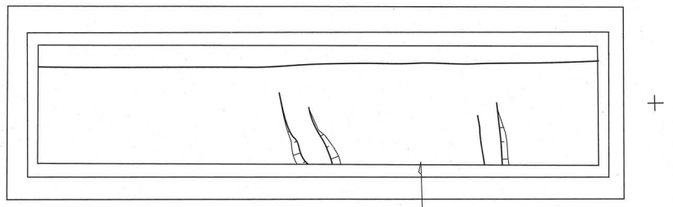
4 トレンチ 2 層　明灰色粘土上



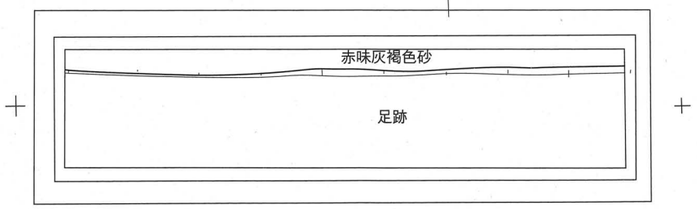
5 トレンチ 1 層　砂上



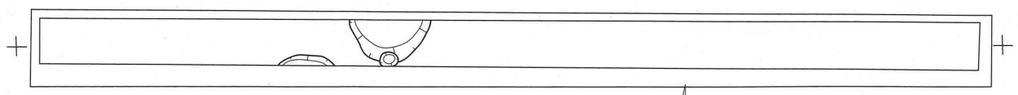
5 トレンチ 1 層　砂下



5 トレンチ 2 層



6 トレンチ 2 層　黄灰色砂質シルト



6 トレンチ 3 層　明灰色粘土

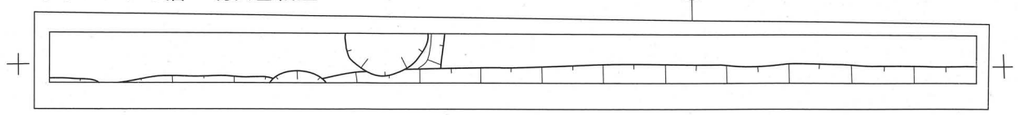
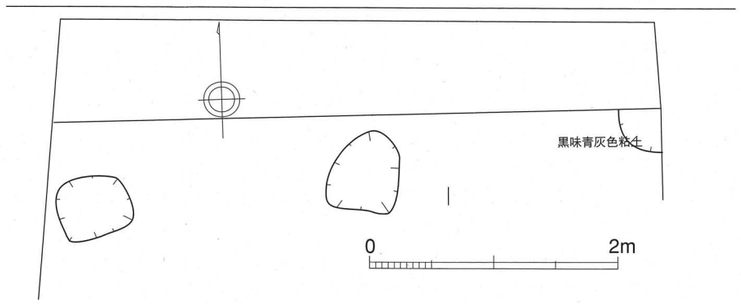
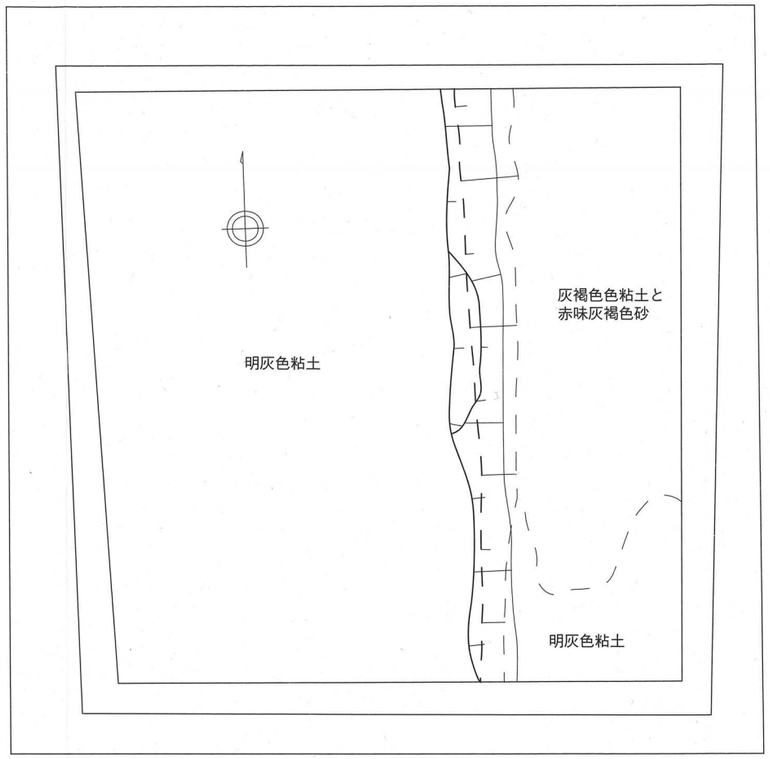


図 8　4 ～ 8 トレンチ平面図

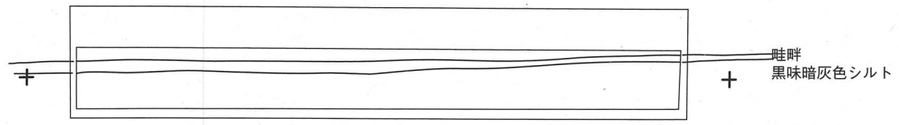
7 トレンチ 4 層北側　下　ピット列



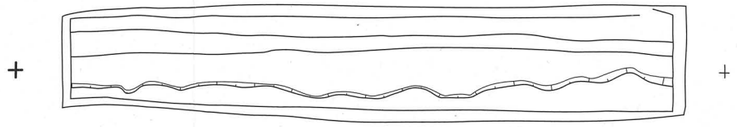
7 トレンチ 1 層　砂上（実線）2 層　砂下（破線）



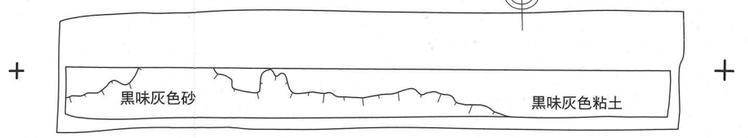
8 トレンチ2-3層　灰色砂質シルト



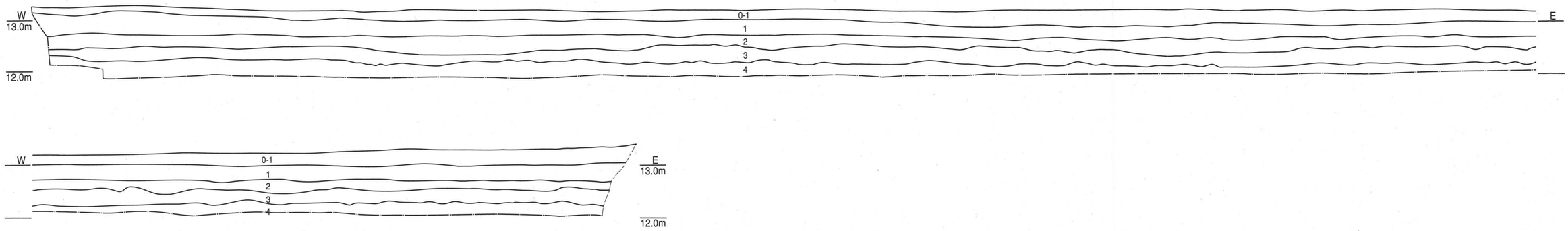
8 トレンチ2-4層



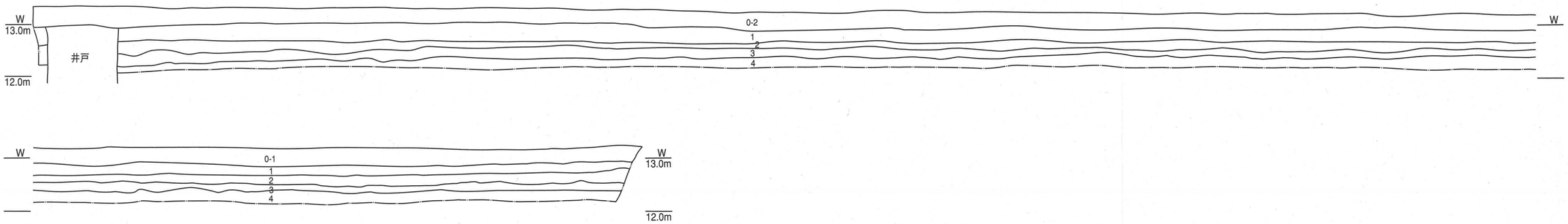
8 トレンチ 3 層上

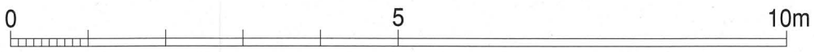


1-1トレンチ



1-2トレンチ





1－1トレンチ

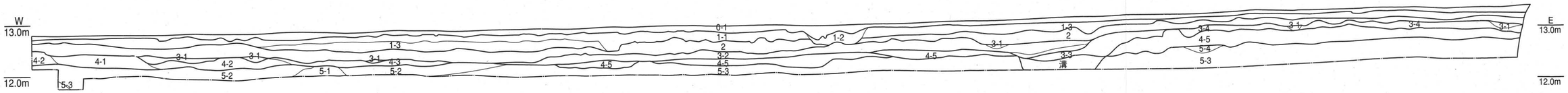
0．表土、地表面は13.2～13.4m
・0-2．旧耕土
1．赤味灰褐色砂
弥生土器、須恵器（古墳・中世）、土師器（中世）
・上層：灰白色の中～粗砂
・中層：黒味～赤味暗褐色粗砂
・下層：赤味灰褐色砂
2．酸化粒多く含む明灰色粘土
須恵器（古墳）、土師器（平安）、陶磁器（近世）
3．黒味暗灰色泥土
弥生土器、庄内式甕、土師器、瓦（奈良）、瓦器・須恵器（中世）
4．粗砂混じり暗灰色粘質シルト、上面が12.2m

1－2トレンチ

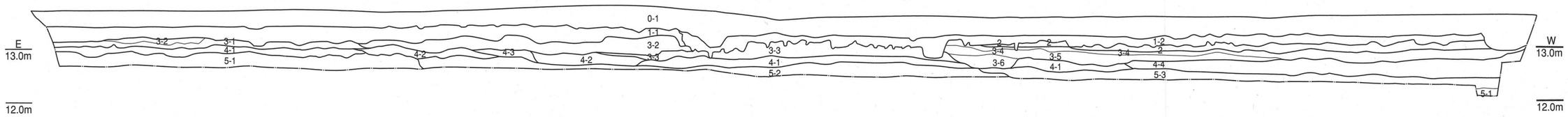
0．表土、地表面は13.2～13.3m
・0-2．旧耕土
1．赤味灰褐色砂
弥生土器、須恵器（古墳・奈良）、土師器、瓦器（中世）、土師器・陶磁器（近世）
・上層：灰白色の中～粗砂
・中層：黒味～赤味暗褐色粗砂
・下層：赤味灰褐色砂
2．酸化粒・砂多く含む明灰色粘土
陶磁器（中世）
3．粘性が強い黒味暗灰色泥土
4．粗砂混じり暗灰色粘質シルト、上面が12.4m

図9　1トレンチ土層断面図

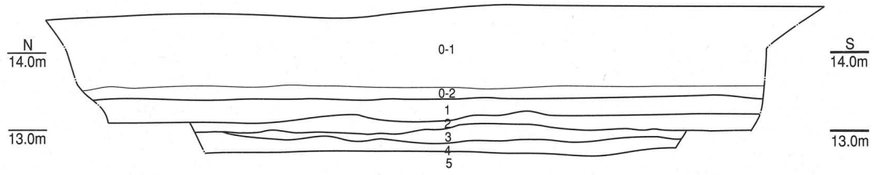
2-1トレンチ

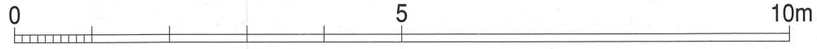


2-2トレンチ



2-3トレンチ





2-1トレンチ

0．表土、地表面は12.8～13.25m
・0-1．旧耕土
1．淡灰褐色砂
須恵器、陶磁器
・1-1：明灰色砂質シルト混じり
・1-2：1混じり明灰色砂質シルト
・1-3：しまり強い
2．黒味灰褐色砂質シルト
弥生土器、須恵器（古墳・飛鳥）、瓦器（中世）、
土師器（古墳・奈良）、瓦・陶磁器（近世）
3．黄味灰褐色粘質シルト
庄内式甕、須恵器（古墳）、瓦（奈良）、土師器、
土師器杯（平安）、瓦器
・3-1：しまり強い
・3-2：明灰色砂質シルト混じり
・3-3：混じり明灰色砂質シルト
・3-4：同・灰褐色砂質シルト
4．黄味灰褐色砂質シルト、上面が12.45～12.85m
瓦器椀
・4-1：明灰色粘質シルト混じり
・4-2：しまり弱い
・4-3：同
・4-4：同
・4-5：5-3混じり
5．黒味茶褐色砂質土、須恵器（古墳）
・5-1：明灰色粘質シルト混じり
・5-2：明灰色砂質シルト混じり
・5-3：5-2よりしまる
・5-4：明灰色砂質シルト混じり

図10　2トレンチ土層断面図

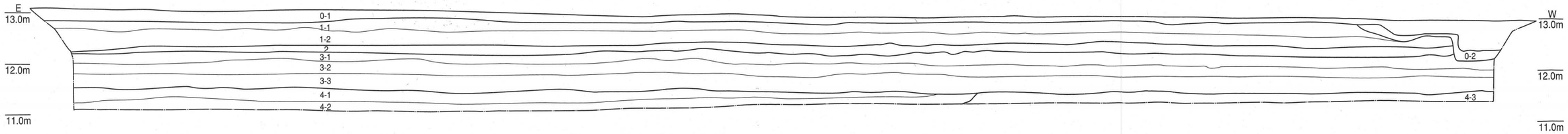
2-2トレンチ

0．表土、地表面は13.6～13.7m
・0-1．旧耕土
1．淡灰褐色砂
弥生土器、須恵器（古墳・飛鳥）、土師器（古墳）、
土師器（中世）、瓦・陶磁器（近世）
・1-1：同
・1-2：明灰色粘質シルト混じり
2．黒味灰褐色砂質シルト
弥生土器、須恵器（古墳・奈良）、土師器（古墳）、
瓦（奈良）、土師器小皿（平安）、瓦・陶磁器（近世）
3．黄味灰褐色粘質シルト
須恵器（飛鳥・奈良）、瓦器（中世）
・3-1：暗い
・3-2：3-1同
・3-3：灰色粗砂混じり
・3-4：しまり強い
・3-5：細礫混じり
・3-6：明灰色砂質シルト砂混じり
4．黄味灰褐色砂質シルト、上面が11.7～12.1m
弥生土器（後期）、須恵器（古墳・飛鳥）、
土師器（古墳・奈良・中世）、瓦（奈良）、
黒色土器（平安）、瓦器・土師器（中世）
・4-1：同
・4-2：明灰色粘質シルト混じり
・4-3：暗褐色砂混じり
・4-4：しまり弱い
5．黒味茶褐色砂質土
・5-1：明灰色粘質シルト混じり
・5-2：明灰色砂混じり
・5-3：明灰色粘質シルト

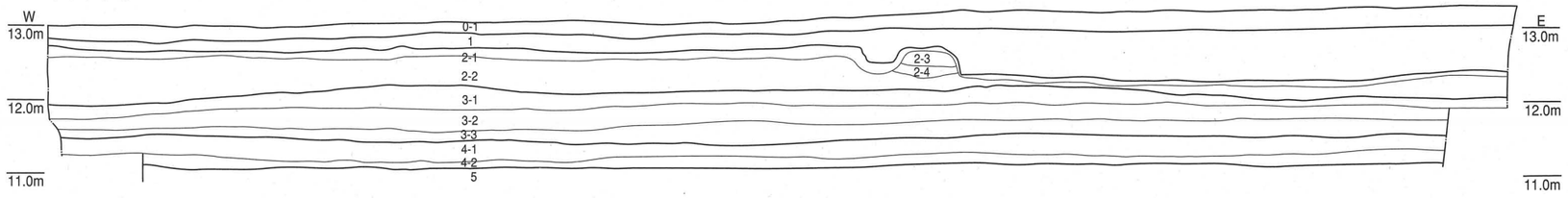
2-3トレンチ

0．表土、地表面は14.6m
・0-1．盛土
・0-2．旧耕土：上面が13.5m
1．淡灰褐色砂
須恵器（中世）
2．青味がかる黒味灰褐色砂質シルト
須恵器
3．黄味灰褐色粘質シルト
4．黄味灰褐色砂質シルト、上面が12.8～13.0m
須恵器（古墳）、須恵器、土師器（中世）
5．黒味茶褐色砂質土

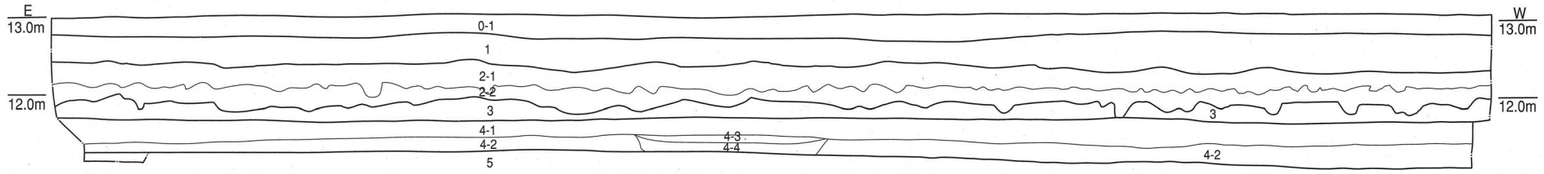
3 トレンチ

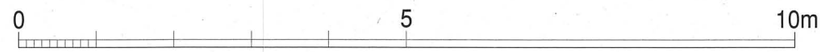


4 トレンチ



5 トレンチ





3 トレンチ

0．表土、地表面は13.1m
・0-1．盛土
・0-2．旧耕土
1．赤味灰褐色砂
土師器、瓦器、陶磁器（近世）
・1-1：灰白色中～粗砂
・1-2：上層：黒味～赤味暗褐色粗砂
　　：下層：赤味灰褐色砂～灰白色細砂
2．細砂混じり明灰色粘土
3．黒味暗灰色泥土
土師器・瓦（中世）
・3-1：粗砂わずかに含む黒味暗灰色粘土
・3-2：粗砂わずかに含む暗黄灰色粘土ブロック混じり
・3-3：細砂わずかに含む酸化粒・粗砂混じり
4．暗灰色粘質シルト、上面が11.5m
・4-1：粗砂～中砂わずかに含む酸化粒混じり
・4-2：4-1より粘性強く酸化粒混じり
・4-3：4-2より暗い細砂混じり

4 トレンチ

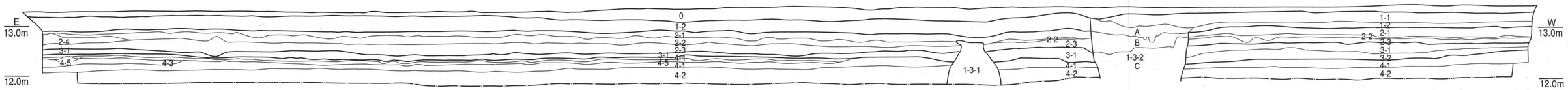
0．表土、地表面は13.1～13.3m
・0-1．旧耕土
1．赤味灰褐色砂・灰白色中～粗砂と黒味～赤味灰褐色粗砂の互層
土師器、須恵器、黒色土器（平安）、瓦器、陶磁器（近世）
2．明灰色粘土
・2-1：酸化粒多く含む赤味灰褐色粘土
・2-2：暗黄褐色粘質シルトの細ブロック含む
・2-3：植物遺体との互層
・2-4：灰色粘土
3．黒味暗灰色泥土
・3-1：粗砂混じり
・3-2：暗黄褐色砂質シルトブロックわずかに含む粗砂混じり黒味灰色泥土
・3-3：わずかに粗砂・細礫、酸化粒を含む
4．暗灰色粘質シルト、上面が11.5m
瓦（奈良）、土師器（中世）、瓦質土器（中世）
・4-1：酸化粒わずかに含む
・4-2：灰色砂質シルト混じり
5．暗黄褐色砂質シルトブロック含む黒味灰色砂質シルト

5 トレンチ

0．表土、地表面は13.0～13.1m
・0-1．旧耕土
1．酸化粒含む砂質シルト混じり赤味灰褐色砂
土師器、陶磁器（近世）
2．明灰色粘土
・2-1：酸化粒含む暗灰褐色粘土・砂の互層
・2-2：酸化粒含む砂混じり灰褐色粘土
3．粗砂わずか・酸化粒含む黒味暗灰色泥土
4．暗灰色粘質シルト、上面が11.7m
須恵器・瓦器・土師器・瓦（中世）
・4-1：酸化粒ごくわずかに含む
・4-2：酸化粒含む灰色粘質シルト
・4-3：酸化粒わずかに含む黒味灰色粘質シルト
・4-4：緑灰色砂質シルト
5．酸化粒・粗砂ごくわずかに含む暗灰色砂質シルト

図11　3～5トレンチ土層断面図

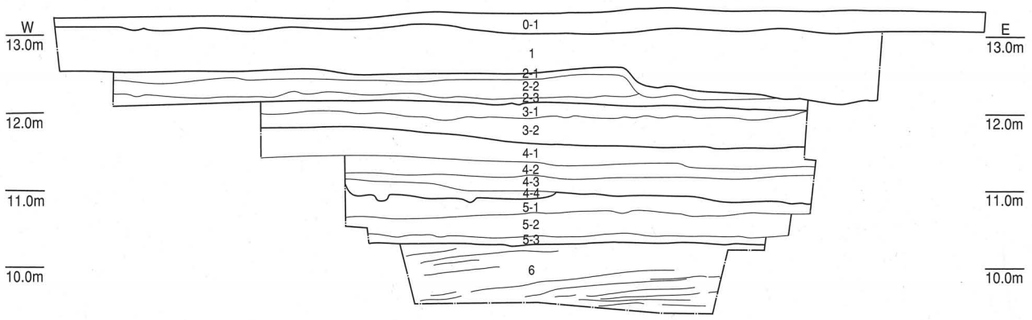
6 トレンチ

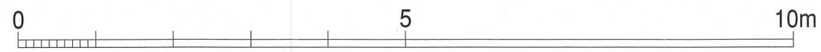


・1-3-1：（井戸埋土）
酸化粒を非常に多く含む粗砂
わずかに含む淡黄褐色粘質シルト

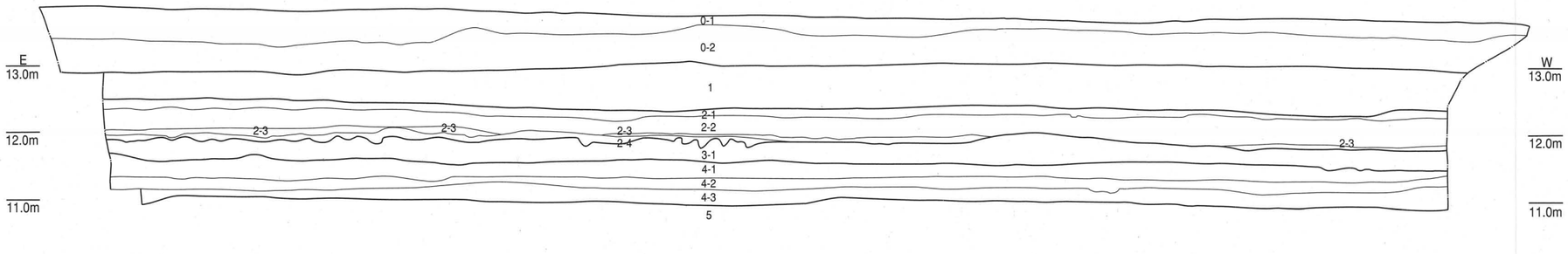
・1-3-2：（井戸埋土）
・A 酸化粒を含む粗砂混じり灰色粘質シルト
・B 酸化粒を含む灰色砂質シルト混じり
茶褐色粗砂
・C 酸化粒含む明灰色粘土

7 トレンチ





8 トレンチ



6 トレンチ

0．表土、地表面は13.3～13.4m
・0-1．旧耕土
1．赤味灰褐色砂
　土師器、須恵器（古墳・中世）、瓦（奈良）
・1-1：灰白色中・粗砂
・1-2：赤味灰褐色砂
・1-3：（井戸埋土）
2．明灰色粘土
　土師器、陶磁器（近世）
・2-1：酸化粒含む淡黄褐色砂質シルト
・2-2：酸化粒含む粗砂混じり淡黄褐色砂質シルト
・2-3：粗砂混じり灰色粘土
・2-4：酸化粒多く含む粗砂混じり淡黄褐色粘質シルト
3．黒味暗灰色泥土
　土師器、瓦器（中世）
・3-1：粗砂わずかに含む・暗黄褐色粘質シルトブロック状に含む暗灰色泥土
・3-2：粗砂わずかに含む・3-1より暗い
4．暗灰色粘質シルト、上面が12.3～12.5m
・4-1：黒味暗灰色砂質シルト混じり
・4-2：同
・4-3：粗砂をブロック状に含む淡黄褐色粘質シルト
・4-4：4-5より粘性がかる灰白色砂混じり暗灰色粘質シルト
・4-5：暗灰色粘質シルト・灰白色砂ラミナ

図12　6～8トレンチ土層断面図

7 トレンチ

0．表土、地表面は13.3m
0-1．旧耕土
1．赤味灰褐色砂
2．明灰色粘土
　土師器、陶磁器（近世）
・2-1：酸化粒含む
・2-2：酸化粒含む砂質シルト
・2-3：2-2に中・細砂含む
3．黒味暗灰色泥土
　瓦器・土師器（中世）
・3-1：細砂混じり粘土
・3-2・3-1で粘質シルト
4．暗灰色粘質シルト、上面が11.6～11.8m
　サヌカイト製・磨製石器、縄文土器（晩期）、
　弥生土器（前期）、土師器（古墳）
・4-1：粘る
・4-2：4-1で明るい
・4-3：4-2より明るく青味がかる
・4-4：ブロック含む黒味暗青灰色粘土
5．暗灰色砂質シルト
　須恵器（古墳）、黒色土器（平安）
・5-1：黒色ブロックわずかに含む青灰色粘質シルト
・5-2：細砂・茶褐色粒多く含む5-1で砂質シルト
・5-3：灰色粘質シルト・砂質シルト
6．淡青灰色細砂～黒味暗灰色有機物層

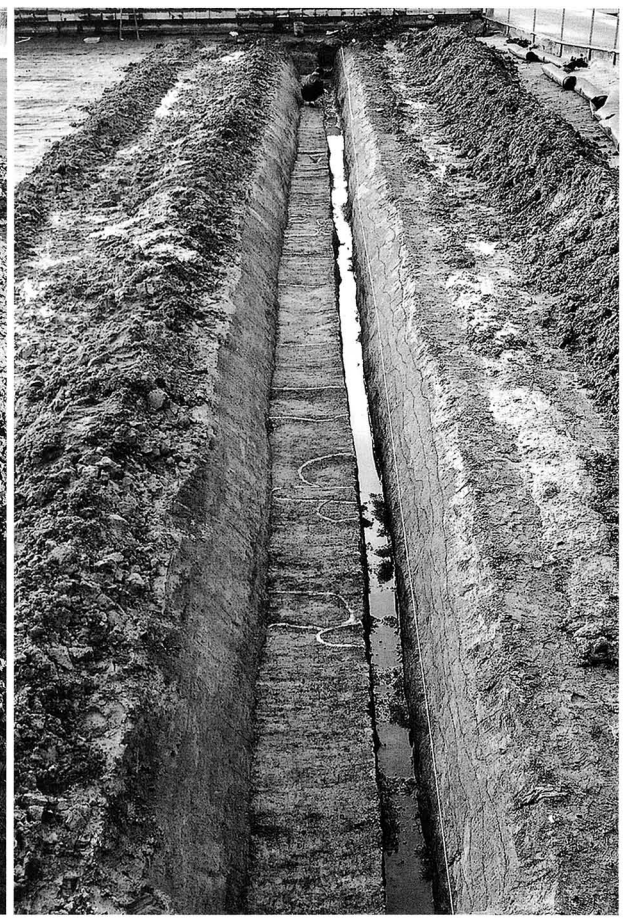
8 トレンチ

0．表土、地表面は13.1～13.3m
0-1．盛土
0-2．旧耕土
1．酸化粒含む明灰色粘土混じり赤味灰褐色砂
　土師器、瓦器・瓦質土器（中世）
2．明灰色粘土
　瓦器（中世）
・2-1：砂混じり灰褐色粘質シルト
・2-2：砂混じり灰褐色砂質シルト
・2-3：灰褐色粘土混じり灰褐色砂
・2-4：灰白色砂混じり明灰色砂質シルト
3．黒味暗灰色泥土
　瓦器・土師器・木器（中世）
・3-1：粘質シルト・粗砂わずかに含む
4．暗灰色粘質シルト、上面が11.5～11.6m
　瓦器・土師器（中世）
・4-1：植物遺体含む砂混じり暗灰色粘質シルト
・4-2：暗灰色砂質シルト
・4-3：粗砂・細礫含む暗灰色粘質シルト
5．砂礫混じり灰色砂質シルト

1-1 トレンチ３層上全景（西から）

1-2 トレンチ１層砂下全景（東から）

2-1 トレンチ４・５層全景（西から）

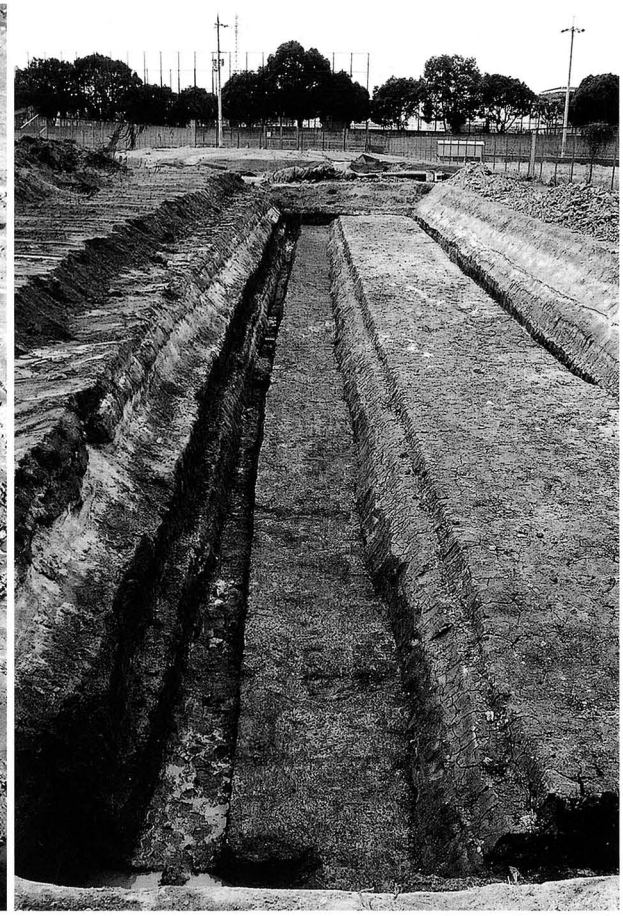


2-1 トレンチ４・５層全景（東から）

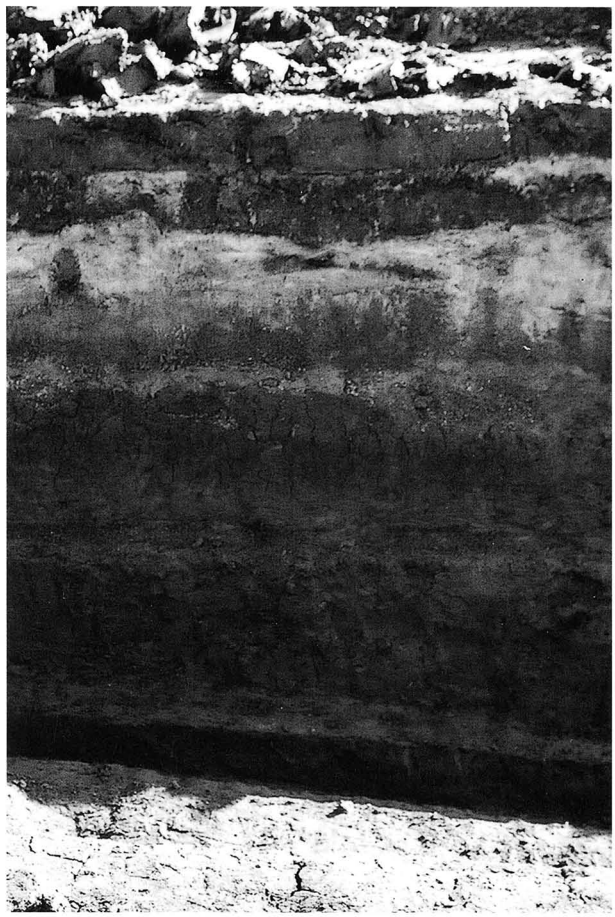
2-2 トレンチ3層全景（西から）

2-3 トレンチ5層全景（南から）

3 トレンチ2層足跡（南から）

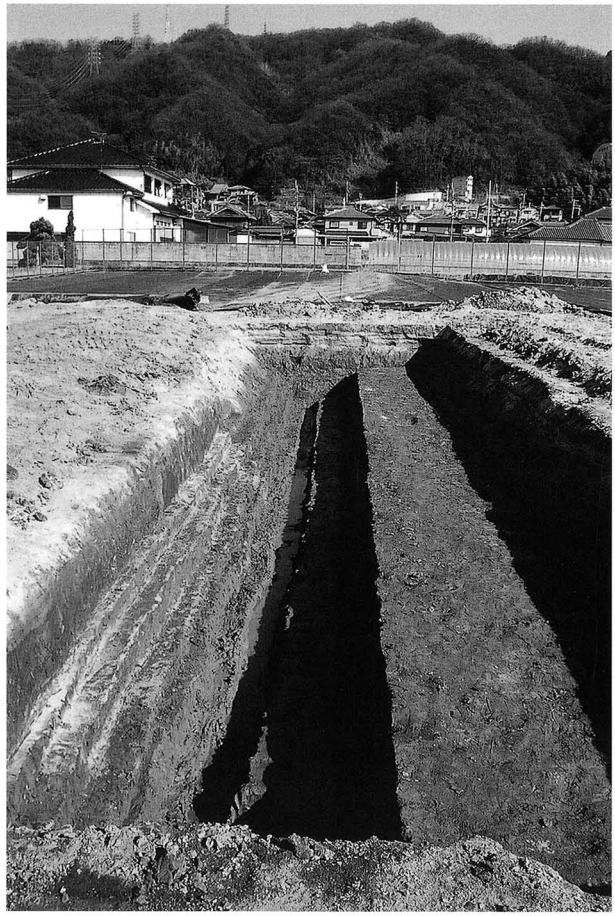


3 トレンチ4層全景（東から）



3トレンチ南壁土層断面（北から）

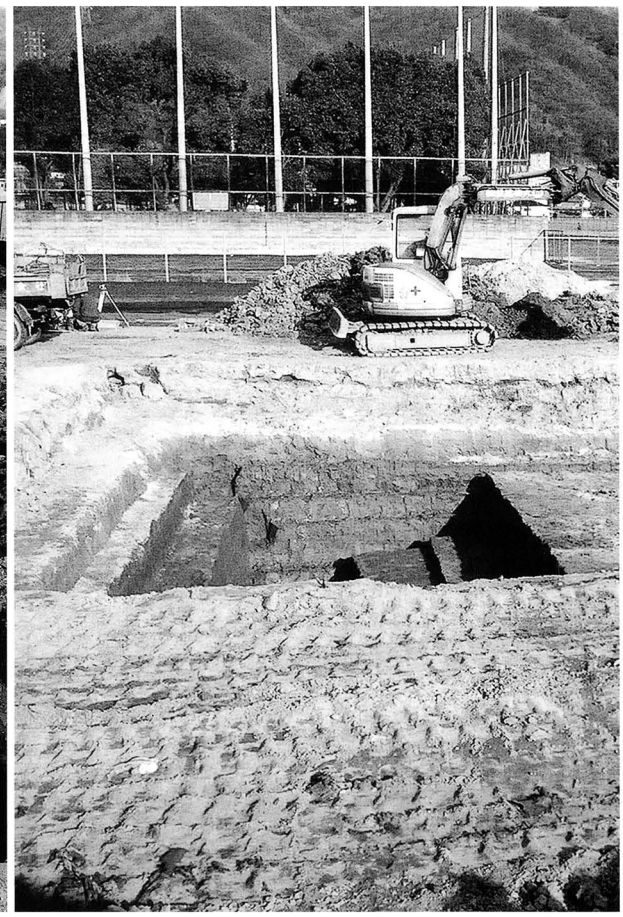
4トレンチ2層全景（東から）



4トレンチ4層全景（西から）

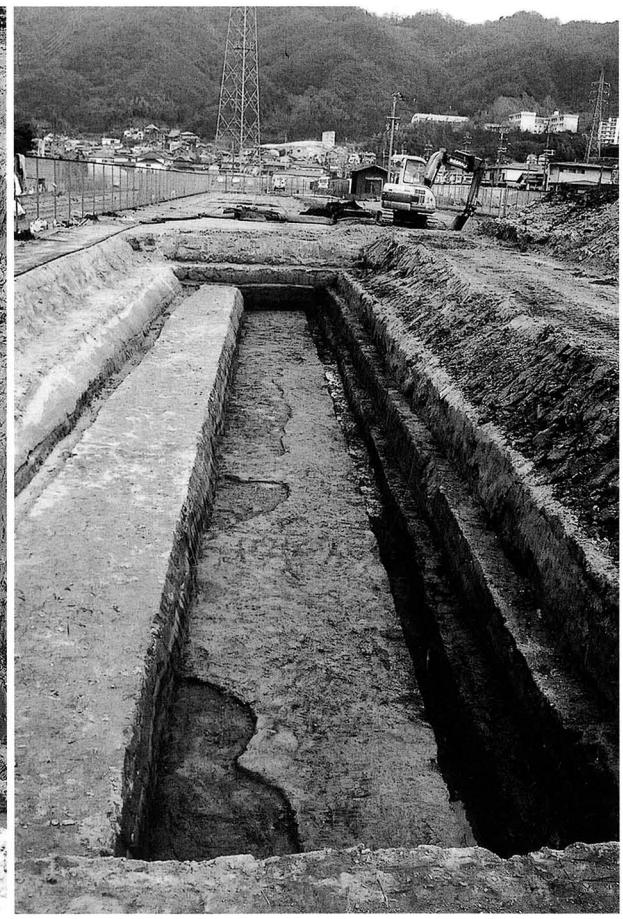
5トレンチ4層全景（西から）

6 トレンチ 3 層全景（西から）



7 トレンチ 4 層全景（西から）

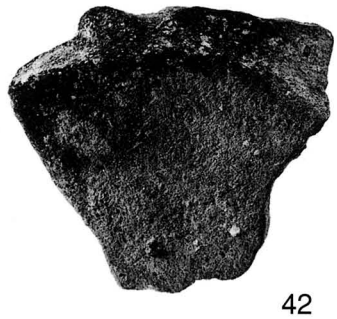
7 トレンチ 4 ・ 5 層（東から）



8 トレンチ 3 層全景（西から）

4－11

4－5



42

4－27

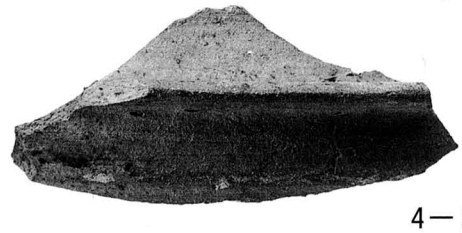
出土弥生土器

4－24

4－33

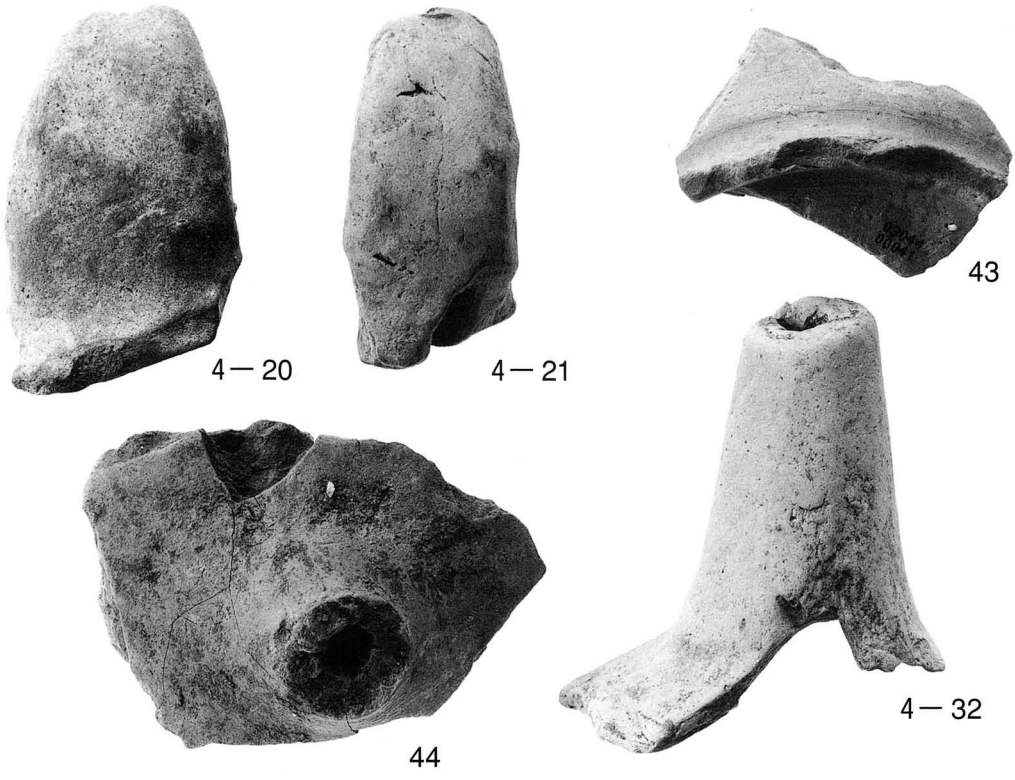
4－8

4－22

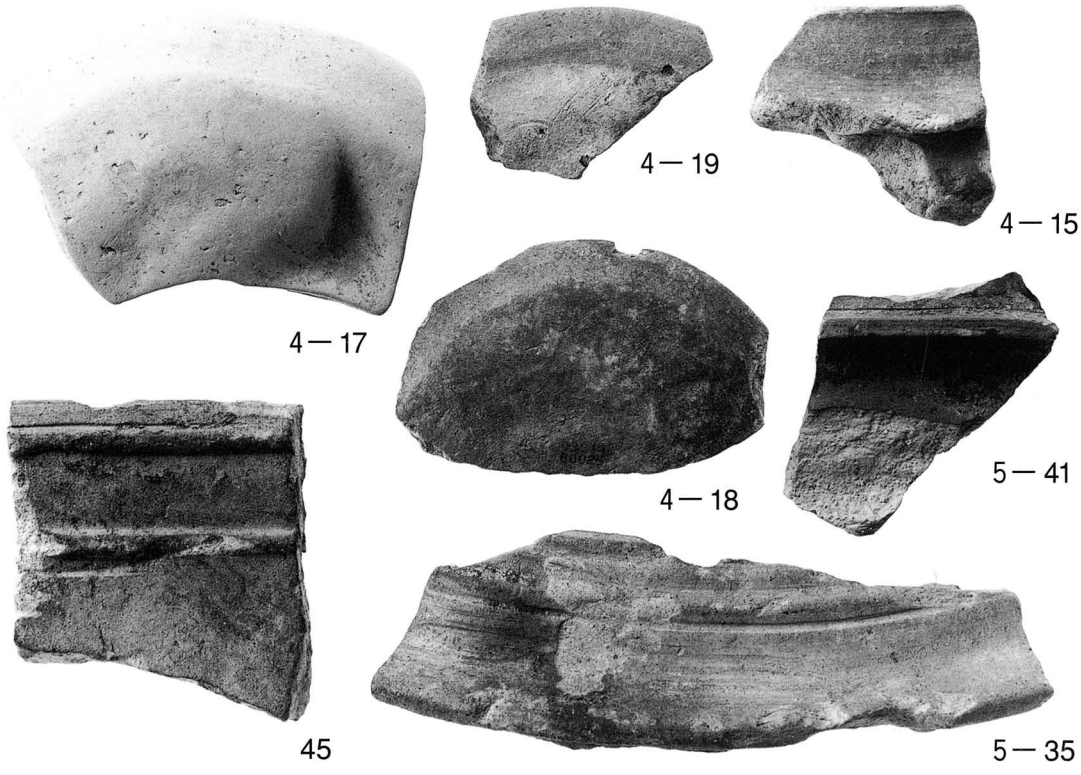


4－28

出土須恵器



出土須恵器・土師器



出土瓦器・瓦質土器・土師器

報 告 書 抄 録

ふ り が な	おおがたぐんじょうりいせき　かくにんちょうさがいよう
書　　名	大県郡条里遺跡確認調査概要
副 書 名	恩智川（法善寺）多目的遊水地予定地の調査
巻　　次	
シ リ ー ズ 名	
シリーズ番号	
編 著 者 名	一瀬和夫、大矢祐司
編 集 機 関	大阪府教育委員会　文化財保護課
所　在　地	〒540-8571　大阪府大阪市中央区大手前２丁目　TEL.06-6941-0351
発 行 年 月 日	2005年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
おおがたぐんじょうり 大県郡条里	かしわらし　ほうぜんじ 柏原市法善寺 ４丁目	27221	69	34° 35'50"	135° 37'55"	2003年12月20日～ 2003年 2月21日 2003年12月 8日～ 2004年 3月26日	1072m²	恩智川多目的遊水地
やまのい 山ノ井			86					

所収遺跡名	種　　別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大県郡条里	条里 集落	縄文時代 弥生時代 古代 中世	中世：溝、落ち込み	縄文時代：土器 弥生時代：土器、石器 古代：黒色土器、瓦 中世：土師器、瓦器 瓦	東側の扇状地は、特徴的なものに初期須恵器があった。また、弥生土器や庄内式甕、上層では溝・土坑とともに古代の土器と布目瓦が出土があった。さらに、平安時代以降の中世遺物は対象地ほぼ全域で確認できた。
山ノ井	集落	弥生時代 古墳時代 古代 中世	古墳時代：溝、土坑、落ち込み 奈良時代：溝、ピット、落ち込み 中世：溝、土坑、ピット、落ち込み	弥生時代：土器、石器 古墳時代：土師器、須恵器 古代：土師器、須恵器、黒色土器、瓦 中世：土師器、瓦器 陶磁器 瓦	

大県郡条里遺跡確認調査概要

恩智川（法善寺）多目的遊水地予定地の調査

発行　　大阪府教育委員会

〒540-8571　大阪市中央区大手前２丁目 TEL06-6941-0351

発行日　　2005年３月31日

印刷　　(株)中島弘文堂印刷所